此の日くらしつその山の邊に

○

わがいほはもりの下いほいつとてもあさちのみこそおひしげりつゝ
國上山杉の下みちふみわけてわがすむいほにいざかへりてむ
いざこゝにわが身は老いむあしびきの國上の山の松の下いほ
あしびきの山べにをればすべをなみしきみつみつゝけふもくらしつ
あしびきの國上の山の山畑にまきし大根ぞあかずをせ君
さす竹の君がすゝむるうまさけにわれゑひにけりそのうま酒に
とふ人もなき山里にいほりしてながむる月のかげぞくまなき
〻山すみのあはれを誰にかたらましまれにも人の來てもとはねば
さす竹の君がみためと久方の雨間に出でゝつみし芹ぞこれ

子供らと手たづさはりてはるの野に若菜を摘めばたのしくもあるか
この宮のもりの木したに子どもらと手まりつきつゝくらしぬるかな
歌やよまむ手まりやつかむ野にやいでむこゝろひとつを定めかねつも
みちのへにすみれつみつゝ鉢の子をわが忘れてぞ來しあはれ鉢の子
風はすゞし月はさやけしいざともにをどり明さむ老いのなごりに
さびしさに草のいほりを出て見れば稲葉うごかし秋風ぞふく
いひ乞ふと里にも出でずこの頃は時雨のあめの間なくしふれば
あきの夜もやゝはだ寒くなりにけりひとりやさびし明しかねつも
雨の降る日はあはれなり良寛坊
飯こばむましばやこらむこけ清水しぐれの雨のふらぬまに〳〵
我がいほは國上やまもとふゆごもりゆきゝの人のあとさへぞなき

よもすがら草のひほりにわれをれば杉の葉しぬきあられふるなり
柴の戸のふゆのゆふべのさびしさをうき世の人にいかで語らむ
飯こふと里にもひでずなりにけりきのふもけふも雪のふれゝば

○

青陽二月初、物色稍新鮮、此時持鉢盂、得々遊市鄽、兒童忽見我、欣然相將來、要我寺門前、携我步遲々、放盂白石上、掛囊綠樹枝、干此鬪百艸、干此打毬兒、我打渠且歌、我歌渠打之、打去又打來、不知時節移、行人顧我哄、因何其如斯、低頭不應伊、道得也何似、要知箇中意、元來唯這是。

○

行々投田舍、正是桑楡時、鳥雀聚竹林、啾々相牽飛、老農言歸來、

見我如舊知、喚婦漉濁酒、摘蔬以供之、相對云更酌、談笑一何奇、陶然共一醉、不知是與非。

○

終日乞食罷、歸來掩蓬扉、爐燒帶葉柴、靜讀寒山詩、西風吹夜雨、颯々灑茅茨、時伸双脚臥、何思又何疑。

○

玄冬十一月、雨雪正霏々、千山同一色、萬徑人行稀、昔遊總作夢、艸門深掩扉、終夜燒榾柮、靜讀古人詩。

○

生涯懶立身、騰々任天眞、囊中三升米、爐邊一束薪、誰知迷悟跡、何問名利塵、夜雨草庵裡、双脚等閑伸。

○

瞑目千嶂夕、人間萬慮空、寂々倚蒲團、寥々對虛窓、香消玄夜永、
衣單白露濃、定起庭際步、月上最高峰。

○

天氣稍和調、鳴錫出東城、青々園中柳、泛々池上萍、鉢承千家飯、
心抛萬乘榮、追慕古佛跡、次第乞食行。

○

草堂雨歇二三更、孤燈寂照夢還曆、門外點滴聲丁冬、壁上烏藤黑蠶皴、
寒爐無炭誰爲添、空床有書手慵伸、今夜此情唯自知、他時異日如何陳。

○

裙子短兮褊衫長、騰々兀々唯麼過、陌上兒童忽見我、拍手齊唱放毬歌。

○

十字街頭乞食了、八幡宮邊正徘徊、兒童相見共相語、去年癡僧今又來。

○

石階蒼々蘚花重、杉松風薰雨霽初、喚取兒童賒村酒、醉後拂却數行書。

○

喬林蕭疎寒鴉集、東籬黃花兩三枝、千峰萬嶽唯夕照、老僧收鉢傍谷歸。

○

國上山下是僧家、麁茶淡飯供此身、終年不過穿耳客、唯見空林拾葉人。

卽ち此の時代の良寛の日常は、かの『彌彦神社附國上と良寛』の著者が最も簡明に敍してゐるやうに「雨には蝸居し、晴れには後山に眞柴を樵り、又は岡に菫を摘み、時に兒童等と手毬を鬪はし、迷藏戲を遊びて倦むことを

知らず、日出でゝは則ち食を街市に乞ひ日暮れば則ち宴臥す」と云つた風なものであつたことが明かに知り得らるゝのである。なほついでに右と同じ著者の詩趣に富んだ敍述を借りて此時代の良寛の日常行事の一面を窺へば次の如くである。

「さはれ良寛が悟道は大乘の悟りなり、枯木寒岩に倚りて三冬の暖氣なきは彼れの唾棄する所、磁石の求めずして鐵を吸收するが如く彼の性情の天眞流露は幾多の識者を其周邊に引付くるものありき、彼れが交遊の重なるものを數ふるに、居士左一、優婆夷有願の兩人は良寛が最も傾蓋の感ありしもの、牧ヶ花の解良氏、島崎の木村氏、渡部の阿部氏の如き、何れも文墨の夤緣ありしと共に彼れが生活の大檀那なりしと云ふを得べく、其他新堀村の醫原田正貞、地藏堂の大庄屋富取氏の二代皆應酬の作あ

り、「行路の人の如き交際に非ざりしを知る、……(中略)……何れにしても彼れが五合庵の獨棲は世人の考ふるが如くしかく枯寂のものに非ざりしが如く、時々此等の檀那又は知己よりの寄贈もあり、彼は遑あれば之等の檀那、若しくは知己を巡訪して或は主人と詩歌を闘はし、或は内君に請うて衣服の洗濯若しくは、仕立替等を遂行し得たりしが如く、當時の彼れの勢力範圍は國上を中心として上は寺泊より或は地藏堂、下は彌彦、粟生津、吉田の方面に及び、時としては新飯田、白根にも達したりしもの、如く、此の間の里人は毎戸良寛の來るを待受けて彼が無二寶珠たる鉢の子に聊かの淨財若しくは淨米を寄與するを常とせり、彼れの草庵にも此等の宗敎者は屢々履を擧げて訪ひたりけむ、竹丘老人の草庵に來れるを喜び叔間に芋と李とを贈れるを謝する詩等もあり、然れ

ども彼れの室裡の最大得意は彼れと共に手毬を遊び或は野邊に若草を摘まんことを強ふる兒童等なりしなるべく、彼等は此の禅僧に對して最も遠慮なく振舞ひ、其欲すると否とに拘らず、時々之を誘致して嬉戯の伴侶に供し、良寛も亦好んで之れに應じたりき、彼の口碑の傳ふる所、彼れが兒童等と迷藏の戯れを爲すや自身鬼となり目を閉ぢつゝある中、兒童の夙に彼れを捨てゝ退散せるを知らずして、翌日に至るまで靜坐して包圍を待ちしと云ふが如き、彼れが如何に兒童等を樂しましめんとて苦心したりしを見るべく、兒童等の彼れに撫き、彼れに傲りしもの亦故なしとせず、かくして彼れの心寂しからざる一日は國上寺の暮鐘と共に暮れて彼れは倦馬と共にこの草庵に歸るなり。

高砂の尾上の鐘の聲きけば

今日の一日はくれにけるかも

これ彼れが五合庵裡の僞らざる日常行事なりき。」

而もかくの如く優遊自適の生活裡にありて、なほ良寛は決して無味枯淡石の如くなることからは、全く反對の境地にあつた。彼れは最後までも人間であつた。否むしろ最も淳眞なる人間であつた。踊りたい時には彼は踊つた。笑ひたい時には笑つた。泣きたい時には彼は泣いた。酒を飲みたい時には彼は酒を飲んだ。歌ひたい時には彼は歌つた。彼は時には遊女の友となつてハヂキの戯れに餘念のない事さへあつたと傳へられる。

さす竹の君がすゝむるうま酒にわれゑひにけりそのうま酒に

風は清し月はさやけしいざともにをどり明さむ老いのなごりに

いざうたへわれたち舞はむぬば玉の今宵の月にいねらるべしや

これほど赤裸に彼は興じもした。

子供らとてまりつきつゝこの里にあそぶ春日はくれずともよし

これほど幼く彼は遊びもした。

山すみのあはれを誰にかたらましまれにも人の來ても訪はねば

柴の戸の冬のゆふべのさびしさを浮世の人にいかでかたらむ

あふ坂の關のこなたにあらねどもゆきゝの人にあくがれにけり

〃あづさ弓春になりなば草の戸をとくいでゝ來まぜ逢ひたきものを

これほど切に彼は淋しがりもし、これほどやるせなき思ひで人間を慕ひもした。

もろ人のかこつ思ひをせきとめておのれひとりに知らしめんとか

わが袖はしとゞに濡れぬさよふけてうき世の中のことをおもふに

これほど深く彼は世を嘆き自らを悲しみもした。他人の不幸を聞き、他人の死に逢つても、彼は世の佛家の法を說いたり來世を語つたりするのとは異なり、たゞひたすらに悲しみを共にし、涙を共にした。わけても彼れの生家出雲崎の橘屋の主人由之(良寛の弟)及びその嗣子馬之助が、町民との間の訴訟事件の結果由之は家財沒收所拂、馬之助は名主役見習取放ちと云ふ事になつたのは、良寛が五合庵に入つてから七年目卽ち文化七年の出來事であつたが、その思ひもかけなかつた不幸が良寛その人の心にどのやうに烈しい打擊を與へたかは實に想像にあまりあるところである。尤もこのことについての良寛の述懷は、今日まで一つも發見されないけれども、さうしたものがないだけそれだけ彼れの心の悲痛の深さも一層おもひやられるのである。

わがごとやはかなきものはまたもあらじと
おもへばいよゝはかなかりけり

まつたく彼はこれほどまでに自己の弱さに泣きもしたのであつた。かくの如く笑ひたい時には笑ひ、踊りたい時には踊り、遊びたい時には遊び、泣きたい時には泣いた彼れでありながら、淨念一とたび彼れのたましひの奥底から湧き上る時には、

◎山かげの石間をつたふ苔みづのかすかにわれはすみわたるかも

わびぬれど心はすめり草のいほひと日ひと日をおくるばかりに

とふ人もなき山里にいほりしてながむる月のかげぞくまなき

この境地にまで透徹する嚴肅な彼であつた。幾度か躓き幾度が迷ひつゝも、彼は結局孤獨に安住して自らの性の淳眞を守り育つべき力を得たのであつ

た。彼れの此の底力は、凡て彼れの孤獨の修業から得られた。おそらく彼ぐらゐ深く孤獨を味はつた人は少ないであらう。試みにかの北國の永い永い冬を、幾尺となく積つた雪の底にうもれた山中の小庵に閉ぢこもつて、唯一人ぢつとしてゐた老貧僧の上を想像して見る。その孤獨、その寂寥——それは殆んど測り知るべからざる深さをおもはせる。しかも、さうした孤獨の底に住し、寂寥の底に居りながらも、彼れは最後までも人間の心を失はなかつた。さうした徹底的な孤獨境に住しながらも、彼はつひにかの所謂悟り切つた冷たい理の人にはならなかつた。決して文字通りの世外の人にはならなかつた。ひしろ彼はその孤獨の修業を積めば積むほど、ますます強く彼は佛陀の愛を感得した。而して此の廣大なる佛陀の愛にいだかれ、身をまかせることによつて、彼れは最後までも自然と人間とを愛慕し

つゞけた。しがもなほ、此の切なる人間的愛慕を感じながらも、彼が餘の者と異なつてゐたのは、餘の者がその愛慕にひかされて走り、つひにはそれの囚ふるところとなるのが常であるのに、彼のみは最後までもその愛慕を我のうちに藏し、常に孤獨なる靈魂の寂光を以て之れを淨化しないで置かなかつた點にある。

世のなかは果敢なきものぞ、足びきの山どりの尾の、しだり尾のながながし世を、百世つぎ五百世をかけて、よろづ世にきはめて見れば、えだにえだちまたにちまた、わかろひてたどる道なみ、立つらくのたつきも知らず、をるらくのすべをもしらず、とき衣のおもひ亂れて、浮き雲の行く方もしらず、言はんすべせむすべ知らず、沖にすむ鴨の羽色の、水鳥のやさかの息を、つきねつゝ誰にむかひて、歎かまし大

津のへにゐる、大船のへつな解き放ち、とも綱ときはなち、大海原のへにおしはなすことの如く、をちかたや繁木がもとを、やい鎌のとがまもて、打ちはらふ事のごとく五つの陰を、さながらにいつゝのかげと、知る時は心もいれず、事もなくわたしつくしぬ世のこと〳〵もうつしみのうつし心のやまぬかも

生れし先にわたしにし身を
津のくにのなにはのことはよしゑやし
たゞひとわしをすゝめもろ人

○

彈指堪嗟人間世、百年行樂春夢中、一息裁斷屬他界、四大和合名之躬、爭名爭利竟底事、慢已慢人呈英雄、請看曠野凄風暮、幾多髑髏遂斷蓬。

○

道妄一切妄、道眞一切眞、眞外更無妄、妄外更無眞、如何終道子、
只管欲覓眞、試要覓底心、是妄乎是眞。

かくの如く彼は明らかにかの所謂五蘊皆空、平等卽差別、差別卽平等の觀境に到入したのであるが、而も彼は此の空觀に執して冷やかなるが如き彼ではなかつた。彼は決して世の所謂白眼子でもなければ拗ね者でもなかつた。前にも述べた如く、彼はかくの如く生活の全體を否定することによつて、おのづからその最も眞實な辯護者とならざるを得なかつた。一切を否定することによつて、彼は始めて一切の根源に冥合することを得たのであつた。

花無心招蝶、蝶無心尋花、花開時蝶來、蝶來時花開、吾亦不知、人亦

不知、不知不知從帝則。

彼はつひに一切を投げ出して、此の天眞に依憑することによつて、始めて全き生を得たのであつた。

おろかなる身こそなか〳〵うれしけれ彌陀のちかひにあふとおもへば
かにかくにものなおもひそみ陀佛のもとのちかひのあるにまかせて
わたしにし身にしありせば今よりはかにもかくにもみだのまに〳〵

かくの如く彼れはおのれを空しくすることによつて、始めて全き自我の安立を得た。彼れみづからの救ひは、かくの如く彼れみづからの全部を投げ出すことによつて始めて得られた。卽ちおのれをむなしくすることによつて、はじめて全き自己が得られ生命の充實が得られたのであつた。

宅邊有竹林、冷々數千干、筍迸全遮道、梢直斜拂天、經霜陪精神、

隔煙轉幽閑、宜在松柏列、何比桃李妍、竿直節愈高、心虛根愈堅、
愛汝貞清質、千秋希莫遷。

これとりもなはさず當時に於ける良寛その人の心境でなかつたらうか。「心虛くして根いよ〳〵堅し」――その確立せる自我の根柢に立つて、彼は始めて廓然たる天地の生を樂しむことを得たのであつた。生命の充實――それは同時に愛でなくて何であらう。自我の安立は、同時に愛の安立であつた。彼はおのれの全部を投げ出すことによつて全きおのれを得、全きおのれを得ることによつて、あらゆるものに對する安らかなる愛を得た。かくの如くして一切の否定者であり、一切に對する懷疑家であつた彼は、むしろその極端に到入することによつて、始めて眞實なる愛の讃美者となり、愛の人となつたのである。

焚くほどは風がもて來る落葉かな

一方に於てかくまで自然に對して謙虛なる自我安立の境に立つた彼は、同時に他方に於てその季節々々に於ける農夫勞役の畫像を掲げて供養新念息らざる念々感謝の彼であり、「すみぞめのわが衣手のゆたならば浮世の民をおほはましもの」と自ら嘆じ、「身を捨てゝ世をすくふ人もますものを草の庵にひまもとむとは」と自ら責むるところの彼であり、又かの有名なる道元和尙の『愛語』を以て座右銘とした彼であり、更に次の長歌一首によつて知らるゝ如き熱烈なる犧牲的愛の讃美者としての彼であつた。

天雲のむか伏すきはみ谷くゞの、さ渡る底ひ國はしも、さはにあれど
も人はしも、あまたあれどもみ佛の、生れます國のあきかたの、その
古への事なりき、猿と兎と狐と、ことをかはして朝には、ぬやまにあ

そび夕べには、林にかへり斯くしつゝ、年のへぬれば久かたの、天のみことのきこしめし、僞りまこと知らさんと、旅人となりて足びきの、山行き野ゆきなつみ行き、食しものあらばたまへとて、尾花折り伏せいこひしに、猿は林のほつえゆり、木の實を摘みてまゐらせり、狐はやなのわたりより、魚をくはへて來りたり、兎は野邊を走れども、何もえせずてありければ、汝はこゝろもとなしと、戒めればはかなしや、兎うからをたまくらく、猿は柴を折りてよ、狐はそれを焚きてたべ、まけのまに〳〵なしつれば、ほのほに投げてわたら身を、旅人のにへとなしにけり、旅人はそれを見るからに、しなひうらぶれこいまろび、天を仰ぎてよゝと泣き、地にたふれてやゝありて、地うちたゝきまをすらく、いまし三人の友たちに、勝り劣りを云はねども、われは

兎を愛くしとて、もとの姿に身をなして、骸をかゝへてひさかたの、天津み空をかきわけて、月の宮にぞはふりける、しかしよりしてつかの木の、いやつぎ〳〵に語りつぎ、言ひつぎ來りひさかたの、月の兎といふことは、それがもとにてありけりと、聞くわれさへに白たへの、衣の袖はとほりて濡れぬ。

要するに良寛は謂ふところの傑僧でもなく、謂ふところの學者智者でもなく、謂ふところの聖者でもなく、將又謂ふところの白眼子でも世外人でもなく、實に最も淳眞なる人間であつた。最も博大なる愛の人であつた。彼は何よりも童男童女を愛したが、彼みづからも最後まで同じく幼な兒の如き淳眞な人間だつたのである。

彼は或日例の如く路傍の子供等と交つてかくれんぼをして遊んでゐた。中

に意地のわるい子供が一人あつて、彼が物蔭にかくれたのをそのまゝ置いてきぼりにしようと云ひ出して無理に他の子供を同意させた。子供等は去つた。そして數時間を經てもなほ彼等は歸つて來なかつた。しかし和尚は平然と元の通りにして子供等の「よし」と呼ぶのを待つてゐた。と、やがてそこを通りかゝつた人が、彼の其の樣子を見つけて驚きのあまり「まあ、良寛樣だのし、何してござるだ」と叫んだ。その聲に彼もおなじく驚いて「馬鹿、そんな大きな聲を出すと鬼が見つけるわ」と云つたと云ふ事が口碑に傳へられてゐる。何と云ふ淳眞であらう。誰かよく斯くまでに他を欺かずに居る事が出來よう。

更にこんな話が傳へられてゐる。ある秋の末の夜、良寛の庵へ盜人が忍び入つた。しかし何一つ奪つて行くやうなものがないので、うろ〳〵して居た。

と、物音に目をさましてその樣子を見た良寛は、その男が哀れになり、自分の着物を一枚ぬいで與へて、やさしく送り出してやつた。しかし、彼はあとでその男の身の上を思ひやつて「いづこにか旅寢しつらむぬば玉のよるのあらしのうたてさむきに」と云ふ一首の歌を詠んだと云ふ事である。何と云ふ貴く美しい愛の表現であらう。

次に又こんな話が傳へられてゐる。ある年の秋の月の晩のことであつた。良寛は興に乘じてとある芋畑の中をあちらこちらとさまよひ歩いてゐた。と、やがてその畑の持主がそれを見つけて、これはてつきり畑荒しだと思ひあやまり、突然鐵拳を揮つて彼の頭を撲つた。そしてそれだけで氣が濟まずに、とう〳〵彼を縛つて木の枝に吊し上げた。それでも彼は逆らはなかつた。が、とう〳〵堪へられなくなつて自分は良寛である旨を白狀し、

芋などを盗む氣は更になかつたが月が佳いのでぶら〳〵歩いてゐたのだと告げて罪を謝した。百姓は始めてそれと知り、大に恥ぢ入つて深く罪を謝したが、和尚は少しも相手を咎めなかつたばかりか、むしろ氣持よさゝうに笑つて、左の如き一首の古歌を口ずさみながら瓢然とそこを去つた。

打つ人も打たるゝ人も諸ともに　如露亦如電、應作如是觀

何と云ふ虚心の沙汰であらう。

更に又こんな事が彼と親交のあつた解良榮重と云ふ人の手記によつて、傳へられてゐる。

「人曰く錢を拾ふは至つて樂しと。師(良寛)之れを聞き自ら地上に錢を捨て、やがて自ら之れを拾ふ、更に情意の樂しきなし。初め人吾を欺くかと疑ふ。捨つること再三、つひに其の在るところを見失ふ。師百計してやうやく拾ひ得たり。その時に至つて初めて樂しきを知る。且曰く人我を欺かずと。」

これは又何と云ふ無邪氣であらう。而も之れ決して世にありふれた禪僧輩の所謂奇行ではないのである。

前記解良榮重の手記中、更に〳〵左の如き驚くべき數行が良寛の爲めに書かれてゐる。

「師余が家に信宿日を重ぬ。上下おのづから和睦し、和氣家に充ち、歸り去ると雖數日のうち人自ら和す。師と語ること一たびすれば胸襟清きを覺ゆ。師更に内外の經文を說き善を勸むるにもあらず、或は厨下につきて火を焚き、或は正堂に坐禪す。其の話詩文にわたらず、道義に及ばず

優游として名狀すべき事なし。只道義の人を化するのみ。」

茲に至つては、いよ〳〵以て彼みづからの救ひを求めることが同時に萬人の救ひを求めることであり、無爲が同時に活動であり、離脫が同時に濟世であり、否定が同時に肯定であり、無我が同時に全我であると云ふ彼が隱遁の眞意義が完成され、徹底されたのであつた。今日の彼ではもはや昨の彼ではなかつた。而も同時に元のまゝの彼であつた。ありのまゝの人間であつた。强ひて世外に立たうとする必要もなく、又强いて俗と異つた奇行を敢てする必要もなかつた。本當の意味での淳眞な人間となつた彼は、一擧手一投足たゞ在りのまゝの彼であつた。

その當時に於ける良寛の日常生活の如何なるものであつたかについては、前に引用した『國上と良寛』の著者の敍述などで既に充分その一斑を窺ふこ

とが出來るのであるが、更に五合庵在住當時の良寛について特に注目すべき事は、上述の如く人としての彼れがしかく圓熟の妙境に到入しつゝあつたと同時に、一方に於て今日私達の見るが如き稀有なる藝術家としての良寛が形造られつゝあつた事である。これは云ふまでもなく彼の人格がおのづから表現されざるを得なかつたからであるには相違ないが、しかもそれはその當時に於ける彼れの非凡な脩練を外にしては到底在り得なかつた程度を示してゐることも亦疑ふべくもないのである。これについて『短歌私抄』の著者齋藤茂吉氏も次の如く云つてゐる。

「良寛自身は、歌人の歌書家の書は厭であると言つてゐるといふ話であるが、其歌人書家といふのは中途半端な歌人書家を意味するのであらうから、良寛の言もさう力のあるものでは無い。良寛は歌の素人を以て處し

たやうであるが、その本質に於て最早素人の域を脱してゐる。素人黒人などは外的に區別さるべきものでない。それから良寛の歌は野呂間な樣でゐてなか〳〵敏なところがある。それは修練の結果である。野呂間と妙境とは程度が違ふ。良寛の歌は素人くさいから佳いのでなくて、妙境に入つてゐるから佳いのである。」

これはたしかに半面の眞を穿ち得た觀察である。而もそれはひとり良寛の歌についてばかりでなく、彼の詩についても書についても同樣に半面の眞實を穿つてゐる。

今日なほ諸家に傳へ藏せられてゐる良寛の書翰その他の文書によつて知り得る如く、五合庵在住時代の良寛は歌に於ても詩に於ても又書に於ても獨り靜かに古人を友として學ぶことを樂しみ得たことは明らかである。

玄冬十一月、雨雪正霏々、千山同一色、萬徑人行稀、昔遊總作夢、
艸門深掩扉、終夜燒榾柮、靜讀古人詩。

おそらく斯うした生活の眞の味ひが、此の頃になつて始めて彼には亂されず囚はれずに味ふ事が出來たのであらう。しかも、それがおのづから彼れ自身の藝術上の修練となつて行つたのでもあらう。就中、古事記、萬葉集、寒山詩、詩經、離騷、陶淵明、李白、杜甫等は、彼れにとりては最も會心の書であつた事が明らかであり、且論語に至つては常に彼の懷にしてゐたところだと傳へられる。彼れが解良叔問の囑に應じて法華經の浮寫をしたのもそのころの事であつた。その他の經典や禪宗諸家の書に親しんだ事も疑ふまでもない事であらう。更に書に於て懷素の自敍帖と、道風のわきはぎ帖との臨摹によつて如何に彼れが書道の修練に努めたかは、今日傳へられる彼

の逸話の數々によつても充分に窺ひ知ることが出來るのである。かくの如くして一方に於て彼れの生活そのもの、人格そのものが、ます〳〵いみじき圓熟と徹底とを示しつゝあつたと同時に、それの表現として彼れの藝術がいよ〳〵それの修練を積み重ねつゝ、いつしか今日見るが如き稀世の程度にまでそれの品位を高めつゝあつたのである。而して今日傳へられてゐる彼の詩に於ても、歌に於ても、亦書に於ても凡て光輝ある大部分は、彼れの此の五合庵在住時代の產物であつた。

更に又それ〳〵の方面に於ける良寛その人の價値が、前に引用した『國上と良寛』中に擧げられてゐるやうな多くの尊崇者には勿論、その頃越後に來遊した江戸の學者龜田鵬齋の如きを始めとして少なからざる認識者を當時の識者間に有するやうになつたのもその頃からであつた。無爲なる彼れの敎化が、むしろ最も積極的な意味に於て、その當時の地方民心の間に及びつゝあつた事も、亦今日よく窺ひ知ることの出來る事實である。しかも、良寛みづからは依然として唯彼一個の救濟の爲めの生活に終始してゐた。彼れの藝術が超然として彼以外の世間の藝術の外に立つてゐたが如く、彼れが求道精進の一路もたゞひとへに彼みづからの他の何者の爲めのそれでもなかつた。彼れは依然として孤獨であつた。しかも、同時に彼れはおのづから凡ての人のうちにあつた。

更にその頃良寛が親しく出入して居た西蒲原郡粟生津村鈴木家に今なほ珍藏されて居る左の如き一葉の書付ぐらゐ、鮮やかにその當時に於ける良寛その人の日常生活の風姿を偲ばせるものは他に少ない。

○第一、受用具

頭巾、手拭、鼻紙、扇子、錢、手毬、ハヂキ、

○第二、隨身具

笠、脚絆、カフカケ、上手巾、杖、掛絡、

○第三、行履物

著物、桐油、鉢、囊、

右出立の砌、可讀之、於不然至不自由者也。

之れは一日良寛が鈴木家に來遊し午睡しつゝあつた間に、その家の主人隆造が、私かに彼の頭陀を開いて見たところ、たま〳〵さうしたものが目に留つたので、悪いことゝは思ひながら、そのまゝ自分の家の珍寶として秘藏して置いたものだと云ふ事であるが、僅に此の一葉の文書のうちに、その當時の良寛の生活の内外兩面の眞實が、いみじくも活現してゐるではな

いか。

良寛その人の物質的の富と云つては、おそらくそれ以上にはなかつたであらう。しかも、彼は此の貧しき物質を以て、無上の滿足を感じ、之れを以て無上の寶としてゐた。彼の行李既にかくの如し、庵室に於ける彼れが日常生活の一斑も之れによつて充分推知することが出來るのである。今日なほ諸家に藏されて居る彼の多くの書翰によつても窺ひ得るごとく、彼れが庵室に於ける衣食の料は殆んど凡て人の來つて與へ、若しくは自ら出でゝ乞ひ求むるところのそれによつて充たされてゐた。しかも、彼はがくして得たる貧しき法施の餘分をすらも、自らのものとして蓄はへて置く事が出來なかつた。そして努めて之れを貧しき人々に頒ち與へるのであつた。

是はあたりの人に候、夫は他國へ穴ほりに行きしが、如何致し候やら

去冬は歸らず、子供を多くもち候、子供また十より下なり、此春は村村を乞食して其日を送り候、何を與へて渡世の助にも致させんと思へども、貧窮の僧なれば致し方もなし、何なりと少々此ものに御與へ可被下候

正月一日　　叔問老　　良寛

更にかくの如く自ら與へるものゝない時には、彼はかうした手數をまで厭はないのであつた。何と云ふ懷しく、たふとい謙虚な愛の生活であつたらう。

往き來の人も稀な山中の一小庵裡、雨に又雪に寂然とたゞ獨默坐せる良寛、破笠襤衣一囊一鉢春に又秋に、ひとりとぼ〳〵と村から村に淨施を乞ひ歩

ける良寛、又は時に村童の群に入つて路傍に嬉戯しつゝ日の暮れるをも忘れて居た良寛、時には又雨中に立てる田中の一つ松にさへ限りない憐れみを寄せて簑着せましを笠着せましをと獨ごちつゝ夕ぐれの泥路に去りあへず佇んで居た良寛――さうしたさま〳〵の幻像を思ひ浮べる時、私達にはかの五合庵時代の良寛が、時にはたまらなく懷しい此の世の人のごとくにも思はれ、時にはとても此の人間の世にはあり得ない神仙譚中の人物のやうにも思はれるのである。しかも、その人によつてその藝術を味はひ、その藝術によつてその人を味はふ時、淒々として盡きない一味の靈泉の常にそこから流れ來たるを覺えずには居られぬのである。

谷かげの石間をつたふ苦みづの
かすかにわれはすみわたるかも

其の清く貴い愛の滴りは、おそらく永遠に盡きることなく汚されることなく渇し求める者の手に掬ばれるであらう。

七、良寛の藝術

――歌、詩及び書――

上來述べた如く、さま〳〵に迂餘あり曲折ある經路を辿つて來た良寛その人の生活が、四十八歳の時國上山中の五合庵と稱する空庵に彼の住するに至つて、初めて渾然たる圓熟乃至徹底の境致を示すことを得たのであるが、而もその事と共に今日の吾々に傳へられる更に一貴層き消息は、彼れの人格の斯くの如き渾成が同時に彼れの藝術の渾成であつたことである。良寛の藝術について論じた人々のうちには或は彼の和歌及び俳句を以て遺傳なりと說いた人もあり、又彼れの歌の長所を以て彼れの勉强の結果であり萬

葉の呼吸に觸れて一意修練を重ねた結果であると解釋した人もあつた。吾吾も無論半面に於てさうした事實を認めないでは居られぬのであるが、しかしさう云つたやうな如何なることよりも先に、此の事實――卽ち良寛その人の藝術の渾成は彼れの人格の渾成を俟つて初めてなされたと云ふ嚴肅なる事實に向つて滿腔の恭敬を捧げないでは居られぬのである。「良寛をして今日吾々の接するが如き彼れの藝術を成さしめたのには、或は彼れの遺傳の力が少なくなかつたでもあらうし、又彼れみづからの修練も與つて力あつたでもあらう。けれども何よりも先づ彼れの藝術の貴い所以は、それが眞に彼みづからの身を以てなされた點にある」。生活そのものゝ表現としておのづから創造された點にある。卽ちそれは伊藤左千夫の云つた如く「作者の生活卽ち歌なるがゆゑ」「作者の生活卽ち歌の生命をなせるがゆゑ」であり、又小林粲樓氏の云つたやうに、それは「彼れが人物の根幹より自然に咲ける花」であり「靈性の物に觸るゝ刹那言端語端悉く天地悠々の律呂に共鳴して」出來たものだからである。

良寛みづからも自分に嫌ひなものが三つある、それは料理人の料理と詩人の詩及び歌人の歌とそれから書家の書であると云つてゐる如く、彼れの藝術の凡ては決して彼れみづからえらい藝術家などにならう爲めにした修練や勉强などによつて出來上つたものではなくして、むしろ彼れみづからの人格と生活の向上の道程に於ておのづから創造されたところの自然の結果に外ならぬのである。言ひかへればそれは彼れその人の生活乃至人格のおのづからなる表現に外ならぬのである。

前にも述べた如く今日吾々に遺されてゐる良寛の藝術の十中八九は、彼れ

の五合庵在住以後に於ける產出にかゝるものである。けれども、彼れが歌をよみ、詩をつくり、或は字を書いたのは、おそらくそれよりずつと以前からのことであつたらう。しかも、今日吾々の知り得る限りでは、彼れが最も深くその道に到入し、最も多くそれの產出を示したのが特に彼れの五合庵在住以後であつた事は、甚だ明らかな事實である。云ひかへれば彼れの藝術の大部分は、彼れみづからの人格の渾成期に至つて初めて成されたのである。又彼みづからも特にその道に向つて、進んで修練に努めたのも、その時期に至つてからの事であることも今更うるさい考證を俟つまでもなく明らかな事實である。而して吾々が特に嚴肅な注意を要するのは、實に此の事實に向つてゞある。

卽ち良寬の藝術は、あらざるべからざる時に至つて始めておのづから現れて來た藝術であつた。云ふまでもなく優れた藝術は凡て作者その人の生活の表現に外ならぬのであるが、特にそれが良寬にあつては、彼れの生活乃至人格が眞に抑えがたきまでにそれの表現を要する時期に達して、始めて突如としてそれのいみじき表現を成したのであつた。これは誠に藝術の稀有な生成の仕方のやうであるが、しかも極めて自然な事に屬する。同時にそれは極めて貴い事柄である。又何人にも能ふかぎり深く味はるべき必要ある一大事である。

更に又彼れの藝術は、實になみ〳〵ならぬ勉强と修練とに負ふところが甚だ多いことも、實に云ふまでもないことであるが、しかも其の勉强と修練とについても、吾々は尋常の字義にのみ拘泥して考へてゐてはならぬのである。

今日知られる如く、彼が歌は萬葉について、詩は詩經、離騷、十九首及び陶淵明、寒山、李白、杜甫について、書は懷素の自敍帖、道風のあさはぎ帖などについて如何に熱心な研究と修練とをなしたかは、全く明らかな事實である。しかも、さうした修練が彼れによつて最も多くなされたのは、實に彼れが五合庵に入つてから以後、卽ち彼れの五十歳前後に於てゞある。彼としても恐らくそれ以前に於て多少さうした方面に力を用ひた事はあつたであらうけれども、しかも眞に內部から湧き上るほどの熱心を以てそれをなしたのは、どうもその頃になつてからの事であるらしい。隨て若し彼れのさうした研究や修練を單に尋常の字義によつて考へる時は、實に彼れを以て驚くべき晩學の人と見做さなければならぬのである。そしてさほどの晩學を以てして、しかもかほどの優れた藝術、かほどの不可思議力を持つ

た藝術を、かほどに速やかに渾成し得た事に向つて、殆んど奇蹟に對するが如き驚異を感じなければならぬのである。けれども、かうした徒爾なる驚きは、あまりに淺はかである。既に〳〵生活卽ち藝術の境地に到入して居た、その當時の良寛を理解することの出來る者にとりては、それは不可思議であるよりもむしろ極めて自然な事と思惟されなければならぬ事であり、彼れの晩學はむしろ彼れにとりて最も適當な時期に於ける修行であつたと思惟されなければならぬのである。

孰謂我詩々、我詩是非詩、知我詩非詩、始可與言詩。

から良寛自身も云つてゐる。箇中の消息にこそ彼れの藝術の貴さも、彼れの修練の意味も含まれてゐるのである。

要するに五合庵在住時代は、一個の人間としての良寛の圓熟期であり徹底

期であつたと同時に、歌人としての良寛、詩人としての良寛及び書家としての良寛の修養期であり同時に渾成期であつた。而して一見極めて驚異とすべき此の事實は、眞によく彼れの生活そのものゝ内部に味到するものにとりては、極めて自然な、極めて貴い事柄に屬するのである。云ひかへれば良寛よ、人間が出來たと同時に、詩が出來、歌が出來、書が出來た、そしてその何れもに於て同時に彼は不朽の生命を得た——此の事實にこそまことに吾々にとりての無上の啓示が存するのである。

良寛は決して尋常の意味に於ける宗教家ではなかつた。彼れは謂ふところの智者學者でもなかつた、謂ふところの大德でもなかつた、謂ふところの救世者でもなかつた、又決して謂ふところの說教者でもなかつた。けれども彼れの如く自己の宗教的生活に、若くは生活の宗教味に、しかく全的な、

しかくいみじき、しかく懷かしき、しかく豐富な藝術的表現を與へた人は、おそらく古來極めて其の類が少なからうと思はれる。彼は經典を說かなかつた。彼は哲學を與へなかつた。彼は思想を傳へなかつた。しかし彼れは離れがたき懷かしさを以て宗教そのものゝ味はひを與へた。人間化した宗教味、生活そのものゝうちに融け込んだ宗教の味はひ——それを彼れは彼の生活と藝術とを通じて、不盡に吾々に與へる。宗教生活の藝術化——此の一點に於て彼れは實に古來稀な一人である。

かの寂寥味と人間味とがいみじき律呂をなして表現された良寛の藝術くらゐ吾々に向つて懷しい、貴い宗教の滋味を與へるものが、他にどれほどあらうか。生そのものに對するまことの愛の表現として、最も淳眞なる人間そのものゝ聲として、かくまでに人間化された宗教そのものゝ味はひを、

他に何人か斯くまでに懐かしく吾々に與へてくれるであらうか。

良寛の藝術中特にその詩歌については、私は既に『良寛和尚詩歌集』の序文として掲げた解説に於て詳しく私見を披瀝したから、こゝでは唯彼れの書についてだけの一通りの解説を附記して置くことにする。

今日でも幾分その傾があるが、良寛の藝術中最も夙く且最も廣く世間の推賞するところとなつたのは彼れの書であつた。

かの儒者鈴木文臺のやうに良寛の生前に於て既に彼れの藝術的表現の三方面(詩と歌と書)を悉く能く理解し評價してゐた人もないではなかつたが、併し多數の人々にとりては矢張能書の一點が特に彼れについて重要視されて居たことは明らかである。それは彼れの行狀に關する逸話中、特に彼れの書に關するもの〻甚だ多く傳へられてゐる事實によつても推知されるところである。試みにそれら多くの逸話中わけて弘く傳へられてゐるもの三四を、『沙門良寛全傳』編者の採錄したもの〻中から拔いて見れば次の如くである。

龜田鵬齋嘗て文化の末年北遊し、禪師(良寛)の書を觀て以て逸品とし往いて其廬を訪ひしに、適〻其坐禪するに會ふ、侍坐半日禪師其俗士にあらざるを知り乃ち款語す、後鵬齋人に語りて曰く、吾良寛に遇ひて草書の妙を悟り、我が書此より一格を長ぜりと。

○

是も鵬齋北遊の途次出雲崎の客舍に停節し、揮灑に從事せし時なりけり、會〻某の囑に應じ雲浦一望樓の扁額を書するや良寛の爲めに其運筆の誤謬を指摘せられ、大に書法の祕訣を悟入せりと。

○

某村富豪某牡丹を愛育し、花時知人を招き觀花の宴を張るを例とす、禪師も亦花候を伺ひ往いて之れを觀、一枝を折りて還れども家人之を不問に附せりしが、一年、主人、禪師の書を得んと欲して未だ得る事能はざるを遺憾とし花時に移牒して來覲を促す、師例の如く之を賞し、一二枝を折りて歸らんとす、主人大に怒り、奴僕に命じて一室に幽閉せしめ、僕をして謂はしめて曰く、主公師が牡丹花を竊折せしを怒る、宜しく文字を書して謝罪すべし、然らざれば幽室を出す能はざるなりとて紙箋、筆硯を供す、禪師冷然毫を援りて可欺不可罔也との意を寓せる俗諺を書せり、主人之を見て忸怩、苦笑して幽室を開きしとぞ。

○

禪師の書之を强請すと雖容易に諾せず、然れども興趣至れば筆を援りて縱横毫を揮ふ、或時七日市山田氏に至り如何なる機嫌にかありけむ直に筆墨を借り、下女部屋の煤ばみたる明障子に鉢の子の歌一首を書し、淋漓たる墨痕を眺め會心の笑を洩して飄然立ち去れりと。

○

これも或處にて興懷坌涌禁ずる能はざりしにや、請ふがまゝに畫仙紙、唐紙に對して縱横揮毫せしが、例の磊落洒脫筆に任せて紙外の疊にまで墨色淋漓たる大文字を書したり、後之を裝して珍藏せりと。

○

某年卷菱湖翁歸國し諸處にて揮灑に從事せしが、某素封家の需に應じ、金屏に揮毫し半雙を終へて別室に休憩せし際、一老頭陀飄然來りて堂に

上り、筆を援りて殘る半雙に忌憚なく揮灑し泛然として去れり、家人之を見て主人に告ぐ、主人の顰蹙想ふ可きなり、卷翁之を聞き到り見れば、筆力遒健、風雲生動、非凡の傑作なりければ、主人に告げて追求せしむ、禪師追手の來るを見るや地上に坐して助命を請ふ、其儀にあらず、願くは同行せられたしとて拉し來り、堂に上せて歡待し、卷翁も主人も謝意を表したりと云ふ。

○

長岡市本町三丁目大里傳四郎氏は屋號を上州屋といふ、市内老舗の一なり。其先代が良寛に請うて酢、醤油、上州屋と書したる招牌の揮毫を得て店頭の明障子に貼附し置きたるを、龜田鵬齋通行の際發見して店主に謂つて曰く、上人の眞筆を店頭に曝すは勿體なし、別に余が書して與ふ

べければ上人のは什襲珍藏すべしとて揮毫して與へたるに依り、其言の如くなしおきつるに、後年卷菱湖翁之を見て曰く、あな心憂の業や、余が一筆を揮ひて與ふべければ鵬齋先生のは秘藏しおくべしと曰はれたるに從ひたりしに、其の後栃尾町の書家富川大晦も同樣の招牌を書したるを與へ菱湖のものをば藏せしめたりと、今皆同家に保存す。

なほかう云つた風な良寛の能書に關する逸話は隨分と多く人口に膾炙されてゐるのであつて、彼れが書に於て卓越してゐた事は、生前から既に一般の識るところとなつてゐたのである。而して此の一事については、彼れみづからも深くひそかに信ずるところがあつたらしく思はれる。

歌や詩に於て師を持たなかつた彼れは、書に於てもおなじく何人をも師としたと云ふ形跡が存しない。しかも、彼れは歌に於ては萬葉集、詩に於て

は寒山詩、陶淵明等の眞髓に觸れてなみ〳〵ならぬ修練に努めた如く、書に於ても亦特に懷素の自敍帖、道風のあさはぎ帖等について實に非常な修練の功を積んだのであつた。而して彼れが書道に於けるさうした修練に從ひ、それによつてあのやうな稀世の美を成し得たのも、亦歌や詩に於けると同じく主として彼れの五合庵在住期以後、卽ち彼れの人格乃至生活の圓熟期に入つてから後のことであつた。この事は歌や詩に於けるとおなじく、實に彼れの書の優越性を理解する上に最も重大な事柄でなくてはならぬのである。

おもふに良寛の如く能く懷素や道風を學んだ人は、古來甚だ少ないであらう。しかも、それと同時に良寛の如く內發的に、自然に、自由に、淳眞に、無邪氣に字を書いた人は甚だ少ないであらう。良寛の歌も詩も、良寛みづ

からの筆蹟を通してゞなければ、眞にその味はひが味はひ盡せないと思はれるほどそれほど、彼れの書は內發的である。彼れの書のいゝところは無論書法そのものゝ修練に負ふところが多いのであるが、しかも彼れの書に於て眞に貴いものは、書に對する彼みづからの態度である。おそらく良寛の書くらゐ筆者その人の主觀の表現された書は古來甚だ少ないであらう。良寛の書は、實に彼れの歌や詩とおなじく、良寛その人の表現である。良寛の書くらゐ筆者その人の氣分や感情の表現された書は殆んどない。最も嚴密な意味で書の藝術味を發揮し得た點で、良寛はおそらく古今獨步の稱に恥ぢないであらう。良寛の書の美しさは決して形式美だけではない。それは常に生きてゐる。常に歌つてゐる。そこに良寛の書の獨特性がある。良寛の書については或は「我邦の古代は姑く置き近世では龜田鵬齋、僧良

寛、僧寂嚴の草書、佐々木志津馬の楷書大字は支那人に見せても恥しくない」(犬養木堂氏)とか、或は「張懐の逸體あり」(鈴木文臺)とか、或は「肉多からずして筋力緊張し、稜角を脱して開蓋自在なる我良寛が書の如きは正に是れ神來の逸品、多く其數を見ざるなり」(山崎良平氏)とか、古來多くの人々によつて讃辭が與へられてゐる。併し何と云つても、矢張良寛の書に於て何人も企及しがたしと思はれる點は、それの表現的であり、内發的であるところにあると思ふ。身を以て書いた字、人格を以て書いた字—

—それが良寛の書ではないだらうか。而して何等の説明なしに、何等の理窟なしに、觀者を化して常にある貴くなつかしい心境に入らしむる魅力を有する點に於て、おそらく良寛の書の如きは古來甚だ稀であると云つていいのではなからうか。

斯う云ふ見地から、吾々は雑誌『日本及日本人』(大正七年三月十五日號)に掲げられた井泉居主人の良寛の書についての左の如き評語に、最も深き共鳴を覺えるのである。

「草書といへば、一般に纖妙軟弱なものと考へられる傾きのある既成觀念が、禪師の草書に依つて快く打破せられることを感じた。自由奔放などと云ふ常套的な言葉では形容し盡されないやうな、もつと本質的な自在無障碍の味ひがある。紙、筆など云ふ物質が物質としてのこだはりを失つて作者の心にすつかり支配されてゐる。禪師が紙に向ふ時は、恐らく、今書を書くぞといふやうな氣持でなしに、たゞ其の刹那の緊張した心のリズムが、一種の線をなして紙の上に踊つたものであるらしい。」

まつたく此の評家の云つたやうに、「禪師の書ほど藝術的な香氣の高い書は

他にあるまい」と思はれる。そして其の藝術的と云ふ意味は、表現的と云ふ意味と相通ずる。良寛の書は同時に彼の生活に外ならぬ。卽ち彼れの書は彼れみづからの生活がもつてゐたものをもつてゐた。彼れの書のいゝところは、結局彼れその人のいゝところに外ならぬのである。

かくの如く考へて來ると、良寛と云つた一個の貧僧が、歌、詩、書と云ふ各種の藝術に於て、殆んど同時にかほどまでの優越性を示すに至つた事は、まつたく驚異に値する事實のやうに思はれる。しかも、その各方面について、眞によくそれの優越性の根源を究め考ふる時、むしろそれが最も自然な結果であつた事を理解することを得るのは、吾々みづからにとりては誠にありがたく貴い事である。要するに良寛は良寛であつて、詩人でも歌人でも又書家でもなかつた——そこにこそ良寛その人の貴さがあるのではな

いか。而してその事を最もよく理解する事の出來る者に、良寛の藝術も亦最もよくそれの功德を與へるにちがひない。

良寛の生活と藝術とは自然に近き素朴のものであつたが、その精神生活は高貴な目ざして居つた。それは高尚な精神生活であつた。子供等と戯れつゝもそれはそこに超脱の生活をいとなんで居つたのである。「思想的平等」の世界は彼の前には開顯せられなかつたのである。それは浮世の執着を脱した生活ではあつたが、「法則なき生活」ではなかつた。無限の生成に隨順する涯底なき生活に沒入する悲戯藝術は彼には求められぬのである。そこには解脱と解決と完成との清淨世界を見出し得よう。しかしながらそれは末代濁世の對照的假設の世界である。……

……三井甲之氏。

八、晩年及び死

行く水はせけばとまるを、たかやまはこぼてば岡と、なるものを過ぎし月日の、かへるとはふみにも見えず、うつせみのひとにもきかず、いにしへもかくしあるらし、今の世もかくぞありける、後の世もかくこそあらめ、かにかくにすべなきものは、老いにぞありける。

ねもごろのものにもあるか年つきは
山のおくまでとめて來にけり

かう彼みづからも悲しみ歌つてゐる如く、心身脱落の徹底境に窮極の安住を得つゝあつた良寛の上にも、自然がもたらす老衰の兆は到底まぬかるべ

くもなかつた。しかも、生きの身の、孤獨なる彼には、依然として薪水の勞を全然脱し去ることは出來なかつた。かくて、彼は限りない離れがたさを感じながらも、結局山を下つて人住む里近くに居を求めずには居られなかつた。彼はつひに意を決してなつかしい國上の山を下りた。十四年の永い間の古巣であつた五合庵を見すてた。

わしびきの國上の山の、山かげの森の下やに、幾としか我が住みにしを、唐ごろもたちてし來れば、夏くさの思ひしなえて、夕づつのか行きかく行き、そのいほのかくるゝまでに、その森の見えずなるまで、玉桙の道のくまごと、隈もおちずかへり見ぞする、その山の邊を。

さうした悲痛の思ひをいだきながらも、彼はつひに山を下りた。しかも、彼はなほさすがに全然そこを離れ去ることが出來ないで、かなりの不自由

をしのびながらも、山麓に近く建てられた乙子宮と呼ぶ小さな神社の境内の一隅の極めてさゝやかな庵に身を容れることゝした。それは文化十四年、彼れが六十一歳の時であつた。

一說に良寛が五合庵を出でゝ、山麓なる乙子祠畔の草庵に移り住むやうになつたのは、老衰の結果薪水の勞に堪へなくなつたからばかりでなくして、むしろ彼自身の過ちから火を失して五合庵を燒いてしまつたからであると云はれてゐる。卽ちその歳の春彼の庵室の床下に彼れの知らぬ間に筍が生へ、それがいつとなしに伸び立つて、つひには床板の隙間から敷菰を破つて頭を擡げるまでになつたのを見出した良寛は、たまらなくそれがいとしくなり、朝に夕にそれの伸びゆくのを眺め樂しんでゐたが、一日その尖頭が屋根裏にまで達したのを見るや、これと云ふ深い考へもなしに、いきな

りあり合せた蠟燭に火を點して其の可憐なる筍の爲めに屋根に燒穴をこしらへてやらうとした。そして其の美しくしかも愚かなる企てによつて、彼は一擧にして彼みづからの棲處の全部を烏有に歸さしめたのであつた。彼が彼みづからの無上の定住處を離れずに居られなかつたのも、つまりはかうした彼自身の美しい過失からである――このやうに口碑の一つは語つてゐるのである。

けれども此の口碑以上に信ずべき種々なる資料より推して考へると、良寛の此の美しい逸事の行はれたのは彼れが出雲崎郊外の中山と云ふところの草庵に假住してゐた間のことで、これと彼れの五合庵を出た事とを結び付けたのは後人の附會によるものらしく思はれる。尤も五合庵そのものも現在のそれは今日より遠からぬ以前に改築されたものに外ならぬが、しかし

此の改築も信ずべき人々の語るところによれば、そのかみの建物の天然に朽廢した跡に、ずつと後年になつて建てたものだと云ふことであるから、良寛がそこを去つたのも一つには彼れみづからの老衰の爲めであつたと共に、一つには庵室そのものゝあまりに朽頽して居るに堪へなくなつた爲めであることが想像されぬでもないのである。

さて、かくの如くして居を人里近く移しはしたものゝ、良寛その人の生活にはさう大した變化の起らなかつたことは疑ふべくもない。それは

この宮の森の木下にこどもらと
　　手まりつきつゝくらしぬるかな

乙宮の森の木下にわれ居れば
　　ぬでゆらぐもよ人來たるらし

○

國上の山の麓の乙宮の、森の木下にいほりして、朝な夕なに岩が根の、こゝしき道につま木こり、谷にくだりて水を汲み、一日〳〵に日を送り、おくり〳〵ていたつきの、身につもれどもうつそみの、人し知らねばはひ〳〵て、朽ちやしなまし萩のねもとに。

かうした彼みづからの歌によつてもほゞ知られるのであるが、しかもそれと同時に彼れの肉體上の老衰が、いつとはなしに彼れのうちに一味の心弱さを加へんとしつゝあつたことも窺ひ知ることが出來るのである。

「良寛の影はかゝる間に次第に里閭に稀に見らるゝことゝなれり、彼れは漸く老いぬ、托鉢に出るにも懶く、知己交遊も多くは世を謝したれば、何處に詩趣逐徴の跡を尋ねんよすがもなし、從つて彼れの小庵を訪ふ人

も追々乏しくなり行きたれば、彼れは無聊に堪え兼ねて

乙宮の森の下庵訪ふ人は
珍らしもよ森の下いほ

と詠ずるに至れり、集中に老を嘆く心、人を待つ心の詩歌の多きは晩年の彼れの心情を流露したるものなる可し」

かう小林粲樓氏も云つてゐるごとく、その頃の良寛は人里に近くしていよいよ孤獨のあはれを感ずる時が多くなつて行つた傾がないでもない。その頃彼が友阿部定珍に寄せたものと思はれる左の如き書翰について見ても、その頃の彼れの何事につけても心弱くなりつゝあつた一端を窺ふことが出來る。

九日の朝の御齋に參上仕度候、しかしながら獨身の事に候間、いかや

うの事有之候て違ひ候とも、人を以て御知せ申候事も致しかね候、且老病の身の上に候へば、御推察可被下候、明日は人にやくそく致候事御座候間、參上致兼候

いひこふと我が來て見れば萩の花
みきりしみゝに咲きにけらしも

八月朔日　　良寛

定珍老

○

先日は久々御意を得、喜悅不斜候、其をりからくあたりて強て御歸申候、甚心なう存候、是は僧の病中に物にうるさく御まかなひ、如何か御不自由にあらんと思候へば、わりなくも御歸申候、御意にかけ不可被下候、近日中に天氣を見合、一日御來臨入待候、あまり食事不進候間、梅干御たくはへ御座候はゞ少々たまはりたく候、以上

十月十日　　良寛

定珍老

かくの如くして、年一年彼の心身の上に老衰の兆が著しくなつて行つた。そして乙子神社境内の草庵へ移つてから十年目に、彼れは再びわが身の置きどころを、一層人里に近く求めないでは居られなかつた。かくて文政九年彼はつひに懷かしい國上の山から全く離れて、以前から彼れの尊崇者であつた三島郡島崎村の能登屋木村元右衞門の裏庭に建てられてあつたほんの名ばかりの別宅へ移り住むことになつた。それは彼れが丁度七十の歳に達した時であつた。

けれども彼れが國上山麓の草庵を去る時の述懷として

ゑにしあらば又も住みなむおほとの〻

杜の下いほいたくあらすな

と云ふ歌があつたり、又島崎へ移つてから友定珍に寄せた書翰に

如仰此冬は島崎のとやのうらに住居仕候、信にせまくて暮しがたく候、暖氣成候はゞ又何方へもまゐるべく、酒、煙草、茶恭受仕候、早々以上。

しはす二十九日　良寛

定珍老

と云ふのがあつたりするところから考へると、彼が這般の島崎轉住の如何に彼れの本意でなかつたかゞ知られるのである。卽ち肉體上の老衰から、

彼は餘儀なく世間の助けを求めてゐたとは云へ、彼のたましひはます〳〵切に山間の孤獨と靜寂とを慕ひ求めてやまなかつたにちがひない。しかも、彼れはつひに人間であつた。一方に於て彼れのたましひがしかく強く孤獨と靜寂との幽玄境を慕ひながらも、他方に於て彼れの肉體上の老衰が加はると共に彼の情意はいよ〳〵切に人間を愛慕しないでは措かなかつた。云ふまでもなく彼れは既に〳〵遠く執着から放たれてゐた。しかも、情外の情、欲外の欲は、一層強く彼のうちに燃えないではゐなかつた。執着を絶して、しかもます〳〵強い愛が、彼のうちにいよ〳〵いちじるしく感じられた。

良寛のこの晩年に於ける淸くして、しかも最も切なる人間愛慕の表現は、彼れの唯一の弟子とも稱すべきかの貞心尼との關係に於てそれの最高潮を

示して居る。この貞心尼の素性は、西郡氏の『良寛全傳』に從ふと大凡次の如くである。

「貞心尼は越後長岡藩士奥村某の女、幼にして淨業を慕ふ、妙齡に至り北魚沼郡小出郷の醫師某に嫁し、幾年ならずして不幸所天を喪ひ、深く浮世の無常を觀じ、つひに柏崎町洞雲寺泰禪和尚に從ひて剃度を受け、後不求庵に住す、是より先良寛禪師の高德を敬慕せしが、文政の末年禪師を島崎村に訪うて和歌を學び且道義を受く、師其の敏慧にして和歌に堪能なるを愛し、懇切に指導せしと、始めて値遇せしは師七十歳貞心二十九歳の時なり、爾來六量霜、花に鳥に月に雪に風に雨に往訪して敬事し、歌を練り道を講じ其の傾會を受け、禪師終焉の際、所謂末期の水を呈せしは弟子としては此の尼公のみなりきと、又禪師の詩歌の今日に傳はり

しも尼公の蒐集せし力多きに居る。又、禪師の肖像として後世に遺るもの亦此の尼公の描寫せしものなり、省像に題せる歌に曰く、

うき雲の姿はこゝにとゞむれど
心はもとの空にすむらむ

と明治五年二月十日寂す、壽七十五、辭世の歌に曰く

來るに似て歸るに似たりおきつ波
立ち居は風の吹くに委せて

と其禪師と贈答の和歌傳記等を手錄せしものを『蓮の露』といふ……云云……

これだけでも良寛と貞心との關係が、なみ〳〵ならぬものであつた事はほぼ察しられるのであるが、しかもかの『蓮の露』のうちに收められた此の

二人者の贈答歌を味誦する時、そこにいみじくも表現されてゐる或るものに對して吾々は殆んど驚異の眼を刮かずには居られぬのである。

師常に手毬をもて遊び玉ふときゝて

これぞ此のほとけのみちにあそびつゝ
つくやつきせぬみのりなるらむ　（眞心尼）

御かへし

つきて見よひふみよいむなこゝのとを
とをとをさめて又始まるを　（良寛）

はじめてあひ見奉りて

君にかくあひ見ることのうれしさも
まださめやらぬ夢かとぞおもふ　（眞）

御かへし

夢の世に且まどろみてゆめを又
かたるも夢もそれがまに〳〵　（良）

いとれもごろなる道の物がたりに夜もふけぬれば

白たへのころもでさむし秋の夜の
月なかぞらにすみわたるかも　（良）

されどなほあかぬここちして

向ひゐて千代も八千代も見てしがな
空行く月のこと問はずとも　（眞）

御かへし

心さへかはらざりせばはふつたの

たえず向はむ千代も八千代も　（良）

いざかへりなむとて

立ちかへりまたもとひこむ玉鉾の
道のしば草たどり〳〵に　（貞）

又もこよ山のいほりをいとはずば
薄尾花の露をわけ〳〵　（良）

ほどへてみせうそこ給はりけるなかに

君や忘る道やかくるゝこのごろに
待てどくらせど音づれもなき　（良）

御かへしたてまつるとて

ことしげきむぐらのいほにとぢられて
身をば心にまかせざりけり　（貞）

山のはの月はさやかにてらせども
まだはれやらぬ峰のうすぐも　（同）

こは人の庵にありし時なり

御かへし

身をすてゝ世をすくふ人もますものを
草の庵にひまもとむとは　（良）

久方の月の光のさよければ
てらしぬきけりからもやまとも　（同）

昔も今もうそもまことともはれやらぬ峰のうすぐもたちさりて
のちのひかりとおもはずやきみ　（同）

春の初つかたせうそこ春るとて

おのづから冬の日かずのくれゆけば
まつともなきに春は來にけり　（貞）

われもひともうそもまことともへだてなく
てらしぬきける月のさやけさ　（同）

さめぬればやみも光もなかりけり
ゆめぢをてらす有明の月　（同）

御かへし

天が下にみつる玉よりこがねより
春のはじめの君がおとづれ　（良）

てにさはるものこそなけれのりの道

それがさながらそれにありせば　（同）

御かへし

春風にみ山の雪はとけぬれど
岩まによどむ谷川の水　（貞）

御かへし

み山べのみ雪とけなば谷川に
よどめる水はあらじとぞおもふ　（良）

御かへし

いづこより春はこしぞとたづぬれば
こたへぬ花にうぐひすのなく　（貞）

君なくば千たび百度數ふとも

十づゝ十をもゝとしらじを　（同）

御かへし

いざゝらばわれもやみなむこゝのより
十づゝ十をもゝとしりなば　（良）

いざゝらばかへちむといふに

りやうせんのしやかのみ前にちぎりてし
ことな忘れそよはへだつとも　（良）

りやうせんのしやかのみ前にちぎりてし
ことは忘れずよはへだつとも　（真）

聲韻の事を語り玉ひて

かりそめのことゝおもひそこのことば

言のはのみとおもほゆな君　（良）

いとま申すとて

いざゝらばさきくてませよほとゝぎす
しばなく頃は又も來て見む　（真）

うきくもの身にしありせば時鳥
しばなくころはいづこにまたむ　（良）

秋はぎの花さくころは來て見ませ
いのちまたくば共にかざゝむ　（同）

されど其ほどをまたず又とひ奉りて

秋萩の花咲くころを待ちとをみ
夏草わけて又も來にけり　（真）

御かへし

秋はぎのさくをとをみと夏草の
　　霜をわけ〳〵とひし君はも　（良）

或夏のころまうでけるに何ちへか出給ひけん見えたまはずたゞ花かめに蓮のさしたるがいとにほひてありければ

來て見れば人こそ見えねいほもりて
　　にほふ蓮の花のたふとさ　（良）

御かへし

みあへする物こそなけれ小かめなる
　　蓮の花を見つゝしのばせ　（良）

御はらからなる由之翁のもとよりしとれ奉るとて

極樂のはちすの花のはなひらを
　　よそひて見ませ麻布小衾　（良）

御かへし

極らくのはちすの花のはなびらを
　　われにくやうす君が神つう　（良）

いざゝらばはちすの上にうちのらむ
　　よしやかはづと人は見るとも　（同）

五韻を

くさぐさのあやをり出す四十八もじ
　　ごゑとひゞきをたてぬきにして　（同）

たちちなの書き給ひしものを御覽じて

みづぐきのあとも涙にかすみけり
ありし昔のことを思ひて　（良）

民の子のたがやさんといふ木にて、いとたくみにきざみたる物を見せ奉りければ

たがやさむいろもはだへもたへなれど
たがやさんよりたがやさんには　（同）

ある時與板の里へわたらせ玉ふとて、友どちのもとよりしらせたりければ急ぎまうでけるに、明日はやごとなき方へわたり玉ふよし、人々なごりをしみて物語りきこえかはしつ、打とけて遊びける中に、君は色くろく衣もくろければ、今よりからすとこそまをさめと言ひければ、げによく我にはふさひたる名にこそと、打ち笑ひ玉ひながら

いづこへも立ちてを行かむあすよりは
からすてふ名を人のつくれば　（良）

とのたまひければ

山がらす里にいゆかば子がらすも
誘ひて行け羽ねよわくとも　（良）

御かへし

誘ひて行かば行かめどひとの見て
あやしめ見らばいかにしてまし　（良）

御かへし

鳶は鳶雀は雀さぎはさぎ
烏はからす何かあやしき　（良）

日もくれぬれば宿りにかへり、又あすこそとはめとて

いざゝらばわれはかへらむ君はこゝに

いやすくいぬよ早あすにせむ　（良）

あくる日はとく訪ひ來玉ひければ

うたやよまむ手まりやつかむ野にやいでむ
君がまに〳〵なしてあそばむ　（真）

御かへし

うたもよまむ手毬もつかむ野にもいでむ
心ひとつを定めかねつも　（良）

秋はかならずおのが庵をとふべしとちぎり玉ひしが、心地例られば
しばしためらひてなどせうそこ玉はり

秋はぎのはなのさかりもすぎにけり
契りし事もまだとけなくに　（良）

其後はとかく御心地さわやぎ玉はず、冬になりてたゞ御庵にのみこ

もらひ給ひて、人々たいめもむづかしとて、うちより戸ざしかため
てものし給へる由、人の語りければ、せうそこ奉るとて

そのまゝになほたへしのべ今さらに
しばしのゆめをいとふなよ君　（真）

と申し遣しければ、その後給はりけること葉はなくて

梓弓春になりなば草の庵を
とくとひてましあひたきものを　（良）

かくてしはすの末つかた俄に重らせ玉ふよし人のもとよりしらせた
りければ、打おどろきて急ぎまうでゝ見奉るに、さのみ惱ましき御
けしきにもあらず、床の上に座しゐたまへるが、おのがまゐりしを
うれしとやおもほしけむ

いつ〳〵とまちにし人は來りたり
今はあひ見て何か思はむ　（良）

むさしの〻くさばのつゆのながらへて

ながらへはつる身にしあらねば　（良）

かゝればひる夜、御片はらに在りて御ありさま見奉りぬるに、たゞ日にそへてよわりによわり行き玉ひぬれば、いかにせんとてもかくても遠からずかくれさせ玉ふらめと思ふにいとかなしくて

生き死にの界はなれて住む身にも

さらぬわかれのあるぞ悲しき　（真）

御かへし

うらを見せおもてを見せてちるもみぢ　（良）

かの『短歌私鈔』の著者齋藤茂吉氏も其の書の中で「良寛と貞心尼との因縁は極めて自然である、この事を思ふ毎に予はいゝ氣持になる、良寛は貞心尼に會つて、ます〳〵優秀なる歌を作つた。その歌は寒く乾きゝつたも

のでなく、戀人に對するやうな溫い血の流れてゐるものである、人間は生の身であるから、いくら天然を愛したとて、天然は遠慮なく人間に迫つて來る、そこにゐて心細くないなどゝいふのは虛である、良寛は老境に達してから淨い女の貞心から看護を受けた、本當の意味の看護である、良寛にとつては、こよなき Gerokomik の一つであつたらう、世にも尊き因緣である」と讃嘆してゐるが、まつたく此の良寛と貞心尼との交りほど純にしてしかもあたゝかく、人間的にしてしかも執着なく、靈的にしてしかも血の通つた、美しく、尊く、いみじき愛は、此の世には殆んど有り得べからざる事の如くに思はれる。

いざなひて行かば行かめど人の見て

あやしめ見らばいかにしてまし

何と云ふ尊い幼なさであらう。

うたやよまむ手毬やつかむ野にやいでむ
君がまに〳〵なしてあそばむ

何と云ふあたゝかさであらう。

梓弓春になりなば草の庵を
とくとひてましあひたきものを

何と云ふ淳眞であらう。『短歌私鈔』の著者の如きも此の一首を評して「急促し極まつた然も流動し止まざる純正不二の心のあらはれである、」と隨喜し、「死に近き老法師の良寛が若い女人の貞心尼に對した心は眞に純無礙であつた」と讃嘆してゐる。まつたくかくまでに淳眞な純潔な人間的愛のかくまでに切實な表現は、さう無暗と在り得るものではない。そこには實に

涙のこぼれるほどの貴い美しさがある。そして良寛の生涯は晩年の此の奇蹟に近い美しい愛の表現によつて、どれくらゐ其の貴さを高めてゐるかわからない。それを通して彼ればまことに淳眞なる人間愛の一の極致を示した。彼の生命はそこに至つて、まさに永遠に亡びることなき人間愛の光りを發し得たのであつた。

島崎村木村家の別室に移つてから後の良寛は、年一年加つた老衰の爲めに、籠居孤坐の日が多かつたと云はれる。而もその寂寥と無聊との底にあつて、彼の生命はかの貞心尼との交りによつて、むしろ反對に最も強烈な、最も純潔な、最も切實な、最も淳眞な愛の輝きを得たのであつた。かくて其の最後の、そして最美の光輝を放ちつゝ、彼の人間的生命は日を追うて寂滅の境に近づいて行つた。そして前に引用した貞心尼の手錄中にも見ら

れる如く、天保元年の秋頃から頓に著しさを増した彼の肉體上の衰弱は、冬の寒さの加はるにつれて、ます〳〵その度を増して行き、年の暮頃にはつひに再び立つ時のないことを明らかに思はせるやうになつた。そのよしを傳へ聞いて、人々は驚いて集つて來た。

むさし野のくさばのつゆのながらへて
　　ながらへはつる身にしあらねば

彼自らも既にこんな風に靜かに穩かに安らかに自分の運命の終りを覺悟してゐた。そしてそれとなく最後の面會に來た人々に向つても、

いつ〳〵とまちにし人は來りたり
　　今はあひ見て何か思はむ（貞心尼に）

さす竹の君と相見てかたらへば

此の世に何かおもひのこさむ（弟由之に）

自ら進んで斯う云つた風な歡ばしい別を告げずには居なかつた。彼は更に靜かに今將に寂滅の境に赴かうとしつゝある自分の姿を眺めさへもした。

裏を見せおもてを見せて散るもみぢ

そこに至つては既に彼の心は自然そのものゝ博大にまで達してゐた。裏を見せおもてを見せて散るもみぢ――それはその場合の彼にとりては決して單なる比喩などではなかつた。彼の眼にはさうした如實の自然が鮮やかに眺められたにちがひない。ほのかな黄金光の遍照した靜かなうらゝかな秋の空――それを彼は見た。その裡にはてしも知れず擴がつた曠野、その曠野のたゞ中に默然と立つてゐる一本の大きな樹、その樹の枝から風もないのに二ひら三ひら音もなく或は裏を見せ或は表を見せつゝ舞ひ落ちる美し

い色の葉――それを彼は見た。そしてそれが今將に亡び行かうとして居る彼みづからであるなどゝ思ひどころでない、擴充した絶對化した心持で、彼はおそらく眼前に展かれた其の自然の美しさを心ゆくばかり味はつたであらう。

かくて彼のたましひは、今やまつたく自然そのものゝたましひであつた。自然と彼とは一如であつた。

かたみとて何かのこさむ春は花
夏ほとゝぎす秋はもみぢば

要するに之れが彼の最後の言葉であつた。これはもう良寛と云ふ限られた一個の人間の言葉ではなくして、實に自然そのものゝ聲であつた。天保二年正月六日、七十五歳を壽命として良寛その人はつひに安らかな大往生をとげたとは云ふものゝ、その死はもう謂ふところの死ではなかつた。良寛その人の生命は、既に〳〵さうした肉體の死に先立つて自然とのいみじき永遠の融會を示して居たのであつた。

口碑の傳うるところによれば、良寛示寂の翌日親族故舊等相會して遺骸を沐浴納棺し、且その枕衾を斂めようとした時に、思ひがけもなく梅の下から四十兩の小判が出たので、人々は故人の用意周到其の死後にまで及んでゐたことを深く感嘆し、その金によつて葬儀から追善の式までも營んだと云ふことであるが、今尙木村家に存してゐる其の當時の記錄について見てもさうした事實の跡が少しも窺ひ得ないばかりでなく、良寛その人の性向や生活の一般と考へ合せて見ても、それはあまりに不自然な出來事の如く思はれる。おそらくそれは他の何人かの逸事が、人口を經ていつしか良寛

その人の上に附會されるに至つたのであらう。

かたみとて何かのこさむ春は花
夏ほとゝぎす秋はもみぢば

吾々は矢張これ以外何等のかたみをも認めたくはないのである。

良寛の遺骸を擁しての葬儀は與板町德昌寺第二十七世活眼大機和尚を導師として營まれた。木村家の記錄に會葬者に供した齋飯用の白米は一石六斗を要したことが記されてゐるところから考へても、その葬儀の如何に盛大であつたかゞ知られると同時に、生前に於ける良寛その人の德化の範圍の如何に廣かつたかの一端をも窺ふことが出來る。之れ又決しておろそかに看過すべからざる事實である。（「建碑その他については「遺跡めぐり」參照の事）

良寛の遺品で今日なほ保存されてゐるものは甚だ少ないのであるが、その

少ない遺品中でもわけて貴いものとされてゐるのは、彼れが最後までも枕邊を離さずに大切にしてゐたと云はれる一幅の掛軸である。それは彼の父以南が半折に「朝ぎりに一段ひくし合歡の花」と云ふ自作の一句を書いたもので、おそらくそれは彼に殘された唯一の父のかたみとして良寛が永く身に添へて秘藏してゐたものであらう。そして其の半折の片端には小さく良寛自身の筆で、左の如き一首の短歌が書き添へてある。

みつくきのあとも涙にかすみけり
ありし昔のことをおもへば

今にして此の一首の意味を味はふ時、良寛その人に對する吾々の心も亦正しくその外に出ないことを、痛切に感じないでは居られぬのである。

○良寛の死顔

高僧傳などによく有る事にてめづらしからぬ事に候へど、面り見し事に候へば御話申上げ〳〵。師病中さのみ御惱みもなく眠るが如く座化し玉ひ、四日目の薪しきにて御棺を野邊に送り、引導も濟みし頃、下三條へんのものとて男一人走り來りどうぞ〳〵一目をがませたまはれと、泣く〳〵手をすりて願ひければ、不便に思ひ、さらばとて棺を開きけるに顏色少しも變らず生けるが如くなりければ、皆驚き、是れは〳〵と、多くのもの立ちかはりてをがみて果てしなければ、やがて荼おほひ、火をかけて、送りの人々も煙と共に立ちわかれ歸りける。云々

——（以上良心尼の文書中より）——

九、逸　話

人が他人の噂をする場合には、多くその人の或る特殊相又は或る特殊の事件や行爲を話材にしたがるものである。そしてその人が噂をし合つて居る當人達にとつて緣遠くあればあるほど、ます〳〵それが甚だしいやうである。更にそれが謂ふところの偉大な人物である場合には、いつ誰によつて拵らへられたともわからない途方もない牽强附會の珍事が無暗と寄せ集められたりする。かくして私達は兎角所謂逸話や逸事を寄せ集めて拵へ上げた多くの偉大なる善人や偉大な惡人や又は偉大な奇人の甚だしく非現實的な超人間的な幻像を持つやうになるのである。これも或る意味に於ては、必ずしも尽くべきことではないが、しかし正當に一個の人間を理解せんとする爲には、矢張さうした特殊相ばかりを觀て居てはならぬ。逸話逸事は、やはり逸話逸事であつて、その人の全生活はそれだけでは構成されないのである。

多くの傑出した禪僧とおなじく、良寛も甚だ多くの逸話奇話を殘した一人である。そしてそれ

らの奇妙な逸話のみを通じて想像された一個の超脱的奇僧が、これまで多くの人々によつて良寛の全體だとされて來た。若し良寛のあの平凡味に徹底した詩歌が殘らなかつたならば、今日おそらく私達は依然として彼を單なる一個の奇僧としてのみ觀るに止まつたであらう。

これまで世に知られた良寛の逸話奇話の多くは、越後の各地（とりわけ彼の住んでゐた西蒲原、三島両郡地方）に口碑として傳へられて來たものであつた。その多くは西郡久吾氏編「北越沙門良寛全傳」中に集錄されてゐる。私がこゝに紹介しようと思ふところのそれも、半ばは口碑によつて傳へられたものであるが、しかし半ば之れまで世に知られずに居た記錄によつて傳へられたものである。その記錄といふのは、良寛が生前親しく往來してゐた越後西蒲原郡國上村大字牧ヶ花解良家に秘藏され來つたもので、同家の先々先代三郎兵衛榮重（文化七年正月八日生、安政六年二月廿六日歿）と云つた人の筆になつたもので「良寛禪師奇話」と題した小册子である。又口碑として傳へられたもの〻多くは、與板町藤井昇雄師その他數氏の注意して集め置かれたのに從つた。それから採錄の順序は漠然ではあるが、年代によることゝした。しかし「良寛禪師奇話」の分だけは他と區別して終りに添へることにした。

□

少年時代の良寛は性質が極めて魯鈍無頓着で襟を正して人に接することなどはてんで出來なかつた。そして土地の人々から「名主の晝行燈」と云ふ綽名をつけられて居た。

□

良寛がまだ、八九歳の頃であつた。家人に叱られる時に、よく上目で叱つた人の顏を睨む癖があつた。或時それを氣にして彼の父は云つた、「親の顏を睨む奴は鰈になるぞ」と。それをぢつと聞いてゐた良寛はやがてぷいと家を出たが、いつまでたつても歸つて來なかつた。家人はひどくそれが氣がゝりだつたので、大さわぎをして方々を搜し廻つたが、なか〳〵見つからなかつた。と、思ひもがけない海濱の岩の上に、彼はたゞ一人しよんぼりと立つてじつと海を眺めてゐた。それを見た人々は驚き喜んでそこへ駈

けつけて行き、それでもなほ氣づかずにぼんやりしてゐる彼をつかまへて、「こんなところで何をしてゐるのだ」と聲をかけた。少年は始めて我に返つたやうに人々の顔を見ながら「おれはまだ鰈になつて居らんかね」と訊ねた。

□

長男と生れた彼は十八歳で父の後を承けて名主役見習となつた。しかし間もなく彼は何か感じたことがあつたと見え、一夕友達と一緒に青樓へ上り痛快な馬鹿遊びをして大金を立ちどころに投費し、しかも何等の悔恨の色なく歸途寺門に走つて剃髪することゝなつたのだと云ふ事である。

□

或は云ふ、彼が出家したのは、家職を繼いでから間もなく、驛中で死刑に

處せられた盜賊があつた、その死刑執行に立ち合はされた場合に深く感ずるところがあつたらしく、歸宅の後直に家を出て桑門に赴いたのだと。

□

或は云ふ、彼は家督を相續すると共に妻を娶つたが、何故か半歳ならずしてその羈絆を脱したのだと。

□

更に又曰ふ、彼が名主見習役となつた當時、出雲崎代官と漁民との間に葛籐を生じ確執容易に解けないところから、彼はやむなく調停の勞をとらなければならなくなつた。しかし魯鈍に生れた彼は、さうした仲裁の任に當りながらも、代官の方へ行つては漁民の惡口雜言をそのまゝ少しも僞らずに告げ、漁民に對しては代官の嘲罵を何等の手加減を施さずに有りのまゝ

傳へ、かくすることによつて事態をます〳〵紛糾せしめ、つひに代官の責むるところとなるに及んで、彼は今更の如く慨嘆し厭世つひに出家するに至つたのだと。

□

更に又曰ふ、彼が名主見習役となつてから間もない時のこと、佐渡奉行が出雲崎を經て佐渡へ渡航したことがあつた。その場合奉行の方では自家乘用の長柄の駕籠をも船に積まんことを求めた。しかし有るかぎりの船の大きさに比べて駕籠の柄はあまりに長かつた、名主役の彼はそれを見て「どうしても積むことが出來ぬなら柄を好加減切つて短かくしたらよからう」と云つた。困じ果てゝ居た船夫等は名主の此の言葉を聞いて喜んでそれに從つた。けれどもその事によつて惹起された佐渡奉行對名主の悶着は容易

ならぬものであつた、之れが結局彼をして世を遁るゝに至らしめた原因であつたと。

□

良寛が備中國玉島圓通寺在學中のことであつた。或る時その附近のある村家に晝盜が忍び入つたと云ふ訴へが村吏の許へ屆いた。村吏はそれは近頃此のあたりにうろついてゐる乞食坊主の所爲に違ひないと云ふので早速その乞食坊主を捕へて來て訊問を試みた。しかし、乞食坊主は何と問はれても一言も答へなかつた。村吏はとう〳〵持てあまして、罪を彼に歸し人々に命じて土穴を掘つて彼を生埋にさせようとした。と、そこへ偶然その村の豪農某が通りかゝつて、ひどくその乞食坊主に同情を寄せ村吏に向つて「事こゝに至つても何等答をしないと云ふのは決して凡人ではない、近頃聞

くところによると圓通寺に一人の雲水があつて表面は極めて凡俗に見えるが内心深い悟道を得て居ると云ふ事である、或は其雲水なのかも知れない」と云ふことを語つた。そこで村吏は再び言葉を改めて訊問して見ると、始めて彼は口を開いて自分が圓通寺の雲水である旨を答へた。そしてその時彼は言葉をつゞけて云つた「人が一旦他人から疑はれ出した以上はいくら辯解したとてそれは結局無益な申譯に過ぎないものだ、それを思つたから自分は之れも何かの見えない自己の罪業の然らしむるところと諦め、如何なる苦しみをも甘んじて受ける覺悟で默つてゐたのだ」と。そこで村吏等は深く自分等の過ちを謝して、早速彼を放免した。その乞食坊主が卽ち良寛であつたと云ふことである。（これは今なほ圓通寺に傳はつてゐる口碑で、圓通寺現住職石川戒全禪師の直話である）

□

玉島圓通寺時代から、良寛は手毬を愛し、童男童女を愛した。そして乞食坊主の姿をして常に手毬歌をうたひながら到るところで子守娘などゝ嬉戯するのを常としてゐたと云ふ事である。

□

良寛和尙に嫌ひな物が三つあつた。料理人の料理と、歌よみの歌又は詩人の詩と、それから書家の書。

□

良寛和尙に好きなものが三つあつた。童男童女と、手毬と、ハジキと。

□

良寛が永い間の雲水の旅から鄕國へ歸つて來て彼が最初に身を寄せたの

は、彼の生地出雲崎から二里ほど隔つた郷本と云ふ漁村の空庵であつたとは『北越奇談』に誌すところであるが、出雲崎の古老の語るところによれば、何でもその前か後かに彼は出雲崎に近い中山と云ふ所の小庵にも居たことがあるとの事である。しかも彼が縁の下に生えた筍を自由に伸ばさせてやる爲めに縁板に穴をあけ、疊に穴をあけ、最後に屋根にまで穴をあけてやつたと云ふ有名な逸事は、そこに假住して居た間の出來事だつたと云ふのである。

□

いつの頃のことか、良寛は出雲崎萬因寺から倶舍論を借讀した。そしてそれを返却する時に謝禮として豆腐を贈り、左のざれ歌一首をも添へたと云ふ。

雁鴨はわれを見捨てゝ去りにけり
豆腐に羽根のなきぞうれしき

□

五合庵在住の前か後かわからぬが、良寛は出雲崎の生家橘屋の若主人馬之助（良寛には甥に當る）がその頃放蕩の噂高かつたのを深く憂ひて、一日訓戒を與へる爲めに出掛けて行つた。しかし、いざなにか云はうと思ふと、どうしても言葉が出ないので、とう〳〵三日を空しく費してしまつた。三日目に彼れは何と思つたか、そのまゝ何も云はずに暇を告げた。が、立ち際に草鞋を穿かうとした手を控へて、彼れは若主人を呼んだ。そして草鞋の紐を結んでくれと頼んだ。若主人も今日に限つて不思議なことを云はれるものだと思つたが、命のまゝに和尚の草鞋の紐を結びにかゝつた。と、その刹那、

良寛は無言のまゝぢつと甥の顔を見守つた。良寛の頰には涙が傳つてゐた。やがて、又無言のまゝ彼れは去つた。

その事あつてから橘屋若主人の生活が頓に改善されたと云ふことである。

□

良寛は托鉢の途中よく路傍の大木の下などに坐り込んで、時に歌や詩の集を讀んだり、時には砂上に指で字を書き、時のたつのをも忘れてゐるやうな事が度々あつたと云ふ事である。

□

手毬とハジキとに對する良寛の愛好は、殆んど神秘の程度に達してゐたらしく、容易に他人からの揮毫の求めに應じなかつた彼れも、子供を仲介者として手毬かハジキ用の貝殻かを贈つて求めさせると、如何なる場合でも

筆を執ることを辭さなかつたと傳へられてゐる。

到るところで良寛は手毬やハジキを玩んでゐる童男童女の親しい仲間であつた。時には遊廓へはひり込んで娼婦どものハジキの仲間にさへなつて平氣で遊んでゐた。その爲めに弟由之から左の如き歌を以て忠告されたことさへある。

すみ染のころも着ながらうかれ女とうか〳〵あそぶ君が心は

しかし、良寛は之れに答へた。

うか〳〵とうき世をわたる身にしあれば
よしやいふとも人はうきよめ

由之はなか〳〵承知しないで、更に次の一首を贈つた。

うか〳〵とわたるもよしや世の中は

來ぬ世のことを何とおもはむ
だが、結局そんな事では良寛はへこまなかつた。
この世さへうから〳〵とわたる身は
來ぬ世のことをなにおもふらむ

□

ある日例の如く良寛は子供等とかくれんぼをして遊んでゐた。中に意地の惡い子供が一人あつて、良寛が物蔭に隱れたのをそのまゝ置いてきぼりにしようと云ひ出して無理に他の子供等を同意させた。そして數時間を經てもなほ彼等は歸つて來なかつた。しかし、良寛は平然と元の通りにして子供等の「よし」と呼ぶのを待つて居た。と、やがてそこを通りかゝつた人が、彼れの其の樣子を見て驚きのあまり「まあ、良寛樣、そんなところに

何をしてござる」と叫んだ。その聲に良寛もおなじく驚いて「馬鹿そんな大きな聲を出すと鬼が見つけるわ」と云つた。これは普通良寛ののんきさ加減を示す好話柄とされてゐるやうだが、私達はむしろそれを子供等に對してさへ「他を欺く」と云ふ事を敢てしなかつた良寛その人の意識的な行爲として見たいのである。

□

多分五合庵在住當時の事であらう、良寛は時々日あたりのよいところに紙をひろげて澤山の生きたシラミをその上に這はして樂しさうに眺めてたり、やがてそれに倦むとそれらのシラミを又自分の懷中に入れたりしてゐたと云ふことである。それかあらぬか、和尙の歌に左の一首がある。

蚤しらみ音に鳴く秋の蟲ならば

わがふところは武藏野の原

□

ある年の秋の月のいゝ晩のことであつた。良寛は興に乘じて芋畑の中をあちらこちらとさまよひ歩いて居た。と、やがて畑の持主がそれを見つけて、これはてつきり畑荒しだと思ひあやまり突然鐵拳を揮つて良寛の頭を打つた。そして、それだけで氣が濟まずに、とう〳〵彼れを縛つて木の枝に吊して置いて、あり合せの棒で滅多矢鱈に擲つた。それでも良寛は逆らはなかつた。が、とう〳〵堪へられなくなつて彼は自分が良寛である旨を白狀し、芋などを盜む氣は更になかつたが月がいゝのでぶら〳〵歩いてゐたのだと告げて罪を謝した。百姓は始めてそれと知り、大に恥ぢ入つて深く罪を謝したが、良寛は少しも相手を咎めなかつたばかりか、むしろ氣持よさゝうに笑つて、左の如き一首の古歌を口ずさみながら瓢然とそこを去つた。

打つ人も打たるゝ人も諸共に
如露亦如電、應作如是觀

□

文化年中江戸の龜田鵬齋が越後來遊中、良寛の書を見て大に敬服し、一日國上山五合庵に彼れを訪ねた。折から良寛は坐禪をしてゐて、遠來の珍客のあるのにすら少しも氣がつかない樣子である。流石の鵬齋もそれには致し方なく、ほゞ半日をその側に侍坐してゐて、やうやく語を交へることを得た。鵬齋が眞に草書の妙を悟つたのは良寛に遇つてからの事だと云はれてゐる。

□

鵬齋の五合庵訪問に關しては、更に今一つの興味ある逸話が傳へられて居る。季節はいつ頃かわからぬが、何でも月のいゝ晩景を選んで鵬齋が五合庵に良寛を訪ねたことがあつた。折から良寛は夕食を濟ましたところらしかつたが、鵬齋の顏を見るや否やかたへにあつた摺鉢を持ち出しそれに水を注いで洗足をすゝめた。鵬齋は驚いて「これは摺鉢ではないか」と云つた。良寛はそれに答へて「いかにもそれは摺鉢だ、しかし味噌をすることが出來ると同時に足を洗ふことも出來るではないか」と云つた。それには鵬齋も返すべき言葉がなく、すゝめられるまゝにその妙な洗足器で足を洗つて、上へあがつた。

鵬齋は好酒家であつた。しばらく話をまじへた後で、彼は酒が飲みたいかと云つた。良寛も酒は好きな方だつたので、今こゝにはないが何なら買ひに

行つて來ようかと答へた。そして相手の返事をも待たずに矢張かたへにあつた酒德利をぶら下げて、良寛は早速出かけた。その時はもうまんまるい月が空高く昇つてゐた。案内のわからぬ此の山腹の小庵に唯一人置き去りにされた鵬齋は、刻々にたまらない淋しさに襲はれるのを覺えた。酒屋への距離はどれ程あるか彼にはわからなかつたが、良寛の歸りはあまりに遲いやうな氣がして、彼はやるせない不安をさへ感じた。

とう〳〵鵬齋はたまらなくなつて、庵から出て、良寛の行つた方角へ何と云ふことなしに歩を運んだ。と、庵からどれ程も離れて居ない所に立つてゐる大きな松の樹の根元に坐つてゐる人影のあるのが目についた。彼は半ば怖ろしく半ば元氣よくその方へ近づいて行つて見ると、それは良寛その人であつた。良寛は松の根に腰かけて、全く我を忘れて月を眺めてゐる樣

子であつた。そして鵬齋に聲をかけられて始めて我に返つたらしく、しばらく怪訝さうにこちらを見て居たが、やがて大きな聲で「どうです、いゝ月ぢやありませんか」と云つた。流石の鵬齋もこれには少し面喰つたが、それでも「月もいゝですが、酒はどうなりました」と云ひ返した。それを聞くと同時に、良寛は慌てゝ立ち上り、かたへにころがしてあつた徳利を引攫んで、「や、忘れて居た」と云ひさま夢中で駈け出した。

□

與板町在の花井と云ふところに、與三治と云ふ佛師があつた。どう云ふことからか良寛にいくらかの貸金があつた。彼は金は少しも惜しいとは思はなかつたが、その貸金を因縁にどうかして良寛の書を得たいものと、永い間心がけてゐた。しかし、なか〳〵、その爲めの機會が得られなかつた。

と、うまい工合に或る時寺泊附近の海岸の一本道で良寛に行き遇つた。かれは今こそとばかり良寛をとらへて貸金の催促を試みた。例によつて良寛は金がないから待つてくれとあやまつた。佛師はこゝだと思つてそれでは何でも好いから字を書いてくれとせがんだ。そしていやがる良寛を無理强ひにして持ち合せの塵紙に字を書かした。良寛は道の眞中に立ちふさがつて兩手に塵紙をひろげてゐる佛師を前に控へて、佛師の矢立から取り出したちびた筆を揮つて左の如き一首の歌を書いた。そしてそれによつて永い間の負債の帳消しをしてもらつた。

このごろの戀しきものは濱べなる
さゞえの殼のふたにぞありける

此の「さゞえの殼のふた」はおそらく丸いもの、卽ち金がほしいの意であ

らうとは、その地方での口碑の傳ふるところである。

□

或る年の秋のことであつた。一日良寛は托鉢の途中、山田の驛の某家の庭に咲いて居た菊の花を折つて持ち行からうとした。すると、その家の主人がそれを見とがめて大に怒つた風をして見せて置いて、その場はそれで濟ますことにした。そしてそれから數日を經てその時の良寛の樣子を繪に畫いて、それを良寛に示し過日の謝罪の代りに此の畫に贊をしてくれと望んだ。良寛もそれには何とも返答の仕樣がないので、やがて無言のままに次の一首を贊とした。

良寛僧が今朝のあさけはなもて逃ぐるおんすがた後の世まで殘らむ

□

或る年の暮近い日のことであつた。その當時家運衰頽してひどく困つてゐた出雲崎の橘屋卽ち良寛の生家へ宛てゝ、良寛から一通の手紙が屆いた。野僧近ごろ金が溜つて困る、山住みの身に甚だ不用心ゆゑ入用ならばいくらでも用立てするから、使をよこしてくれと云ふやうな事が書いてあつた。此の手紙を受取つた山本家では、時が時として其喜びは一通りでなかつた。早速何か御馳走をとゝのへてそれを持たせて使を送つた。使の者が五合庵を訪ねると、丁度良寛在庵中であつた。良寛は使の者から御馳走の重箱を受取つてそれを棚へ上げるや否や、別室に入つて出て來なかつた。使の者は空しく數時間を過して今か今かと待つて居たが、良寛はつひに出て來なかつた。使の者もとう〳〵待ちきれなくなつて、別室に向つて聲をかけると、漸くの事で良寛が出て來た。見ると、彼れは頻りと寢ぼけ眼をこすつ

てゐる。使の者もこれには呆れ果てゝ、仕方なくこちらから用向を打ち明けた。すると、良寛は「さうか」と云つて笑ひながら懐中から一包の金を取り出した。そして長時間を費してその紙をほぐし、最後に中から一朱銀一枚を取り出した。使の者はいよ〳〵呆氣にとられてしまつた。しかし、良寛は頗る眞面目で、それを使の者に渡すと同時に云つた、「さあこれだ、大切にして持つて行かつしやい」と。

□

良寛の歌に「神嘗月の夜蓑一つ着たる人の門に立ちて物こひければ」と云ふ前書きをした

いづこにか旅ねしつらむぬばたまの
夜のあらしのうたてさむきに

と云ふ一首の歌があるが、此の歌は一夜良寛の庵へ盗人が忍び入つて何も捕るものがなくてうろ〳〵してゐるのを見て良寛はそれが氣の毒になり、自分の着物をぬぎ與へて送り出してやつた折に詠んだ歌だとも云はれてゐる。

□

良寛の容貌には、大體に於てさう大して異常なところがなかつたさうであるが、たゞ頸が正面へ向いたまゝ左右へ廻らないやうに出來て居たと云ふことである。

□

良寛は庵室にある間よく習字に努めたらしく、或人の訪ねた時机の上に反古が山を成して居り、その上によごれた褌が載せてあつた事などがあつた

と云ふ。

□

手習ひの速成法として良寛が誰かに敎へたと傳へられる話に、「何でもいゝから手を澤山動かせ」と云つたと云ふ事、「手本によつて字を習ふ時は眼は絶えず手本の上にだけ注いで決して自分の書く字の方を見てはならぬ」と云つたと云ふ事などがある。なほ良寛自らは毎朝空中に千字文を一通りづつ書き習ふのを常としたと云ふ事である。

□

良寛のかいた繪と稱するものが諸所に保存されてゐる。至極簡單なものに過ぎないが、全然素人の筆とは思へないところがある。傳ふるところによると、良寛はいつ頃の事か越後燕町在の新田と云ふ村に庵を結んでゐた桃

流と云ふ坊さんについて畫法を學んだ事があると云ふ事である。桃流は狩野梅莊の弟子で相當にいゝ繪をかいた人だと云ふ。

□

良寛の得意な畫題の一つに髑髏があつた。いつ頃の事か明らかでないが、これも髑髏を好んで畫いた山岡鐵舟居士が良寛の髑髏圖を見てひどく感心し、「良寛の髑髏は脂氣がぬけて居るが吾輩のにはどうもまだ脂氣があつて面白くない」と嘆じたことがあると云ふ話である。

□

良寛は又大工仕事のやうな手細工を好んだ。隨て大工を非常に好んだ。そして「世の中に大工の仕事ほど正直なものはない」こんな事をもよく口にしてゐたと云ふ事である。何でもない桐の木の箱に「南無阿彌陀佛」と云

ふ六字を墨さしで書いたらしい良寛の筆蹟が諸所に見出された。これは恐らく大工が箱などをつくる心持は南無阿彌陀佛を念ずると同じ心持でなければならぬと云ふやうな意味で特に良寛が書いてくれたものであらうとは、或る高德な老僧の推定であつた。

□

或る時誰かゞ良寛に向つてたづねた。

「あなたは古人のうちで誰を一番よく學ばれましたか、西行法師ですか、喜撰法師ですか。」

良寛は答へた。

「わしは何人の善いところをも學ばない。皆の學び殘したところを學ばうと思つて居る」

問者は重ねて問うた。

「それでも一休和尚だけにはいくらか學ばれるところがあるでせう」

良寛は答へた。

「まづさうと云ふものだ」

問者は三たび問うた。

「それはどんなところですか」

良寛は答へた。

「これだ」

かう云ひながら良寛は懷中の論語を問者の前に示した。これも或る老僧の語つたところである。

□

良寛の藏書には藏書印の代りに「今我が家にあり」と云ふ文句が自署してあるものが多かつたと云ふ事である。

□

良寛の親しく出入してゐた與板町の某富豪が、或時大金を投じて當時盛名の畫家應擧に頼んで、犬ころを幾匹か畫いてもらひ、驚くべく立派な表裝を施して床の間にかけ、それを自慢話の種にしてゐた。折から良寛が其の家を訪ねて、一夜をその掛物のかけてある座敷で明すことゝなつた。そしてその贅澤な掛軸をつく〴〵眺めてゐたが、やがて家人の見ぬ間をねらつてその繪の餘白に思ひ切り自由な書き方で贊を書いた。そして素知らぬ顔に翌朝その家を辭し去つた。

□

地藏堂町に一人のたちの悪い舟子があつて、或る時良寛の乘り來つたのを見、一つ脅かして見ようとたくらみ、川の眞中近くでわざと舟を覆して良寛を水中に投じた。そして暫く良寛の苦しむのを見て樂しんでから、舟へ引き上げてやつた。しかし、良寛は少しも驚きもせず、怒りもせず、困りもしないで、むしろ一命を救つてくれた舟子の恩に對して深い謝意を表して飄然と立ち去つた。

□

良寛が地藏堂の文人畫家富取芳齋に語つたと傳へられる話に「手紙の字だけは小供が讀んでも解るやうに書かなくてはならぬ」と云ふ一事がある。

□

良寛終焉の地として名高い三島郡 島崎村 木村家の 女に向つて 良寛の與へた教訓の一つとして「女はわけて大きな聲で話をするやうにしなければならぬ、小さな聲で云ふ女の話にろくな事はない」と云ふ事が傳へられてゐる。

□

毎年田植ゑの季節になると、良寛はきまつて農夫が田植ゑの作業に從事してゐる樣子を自畫してそれを庵室にかけ、その前に香華を供へるのを常とした。秋の收穫季にも亦同樣の擧に出づることを忘れなかつた。

□

良寛は常に到るところに托鉢し、到るところに宿を求めた。しかし、決して同じ家に二泊以上留まらなかつた。殊に晩年には滅多に外泊することはなかつたと云ふ事である。

□

良寛が晩年の頃の話である。一日良寛は三島郡竹森の星彦右衞門方を訪ねた。そして日暮れまでそこに居て、夕食後その家の主人に伴はれて隣家へ湯をもらひに行き、入浴後直ちに辭し去つた。良寛が出て行かうとする時、その家の子供は「あ、良寛さま其の杖はうちの杖だ」と呼びかけた。良寛は一向それを氣にもとめずに「いや、おれの杖だ」と云つたまゝさつさと出て行つた。しかし、實はそれは良寛の杖でなくて他の人のであつた。良寛の杖は依然として星家に殘されてあつた。

と、時經てから良寛は思ひがけなく「杖を取り違へてすまんかつた。」と云ひ〳〵戻つて來た。しかし、その時はもう餘程夜が更けて居たので、家人

は頻りに泊つて行けとすゝめ、その代り今夜こそ何か書いて貰ひたいとせがんだ。良寛も仕方なく「困つたなあ、それでは何か書くものがあつたら書いて行く」と云つた。が、折あしくそこには持ち合はせの紙がなかつたので、主人は庄屋へ紙を借りに出かけた。すると、その留守に良寛は爐邊に掛けてあつた香代帳を取り下して、

老の身のあはれを誰にかたらまし
杖を忘れてかへるゆふぐれ

と云ふ一首を書いて、主人の戻つて來ぬ間に闇夜に提灯も持たずにさつさと歸つて行つてしまつた。

□

良寛の死病は、俗に云ふ痢病であつた。その點では芭蕉と同じである。

しかも、和尚も亦芭蕉と同じく其の最後の一瞬時までも、聊かも我を忘れて取り亂すやうなことがなかつたと云ふ。加之、良寛は病毒の他人に傳染せんことをおそれて、一切他人を近づけず、極めて明らかな意識を以て最後まで痢病經に敎へてある通りの作法を守りつゞけたと云ふことである。

これ以下は前に述べた解良榮重の手記になつた「良寛禪師奇話」と題する小册子中の挿話を多少文章を改めて始めて世に紹介するものである。

□

良寛禪師は常に默々として動作閑雅、餘有るが如し、心廣ければ體ゆたかなりとはこのことならん。

□

禪師常に酒を好む。然りと雖量を超えて醉狂に至るを見ず。又相手は田父野翁たりとも、互に錢を出し合ひて酒を買ひ呑む事を好む。しかも汝一盃吾一盃と云ふ風に、盃の數彼我幾多少なからしむるを常とす。

□

又煙草をも好む。初めは煙管、煙草入等を自ら持ちし事なく他人のものを用ひて吸ふを常とせしが、後自ら持つ事あり。

□

禪師その隨身の具を他家に至る毎に多く遺失し去る事あり。或人敎へて其の品々を書記し、出立する前讀むこと一遍せよと云ふ。師宜なりとし、後自ら隨身の具を書記して出立の前必ず一讀す。今其の書付某家にあり。

□

師常に云ふ、吾は客あしらひが嫌ひなりと。

□

又言ふ、人の家に到る毎に、必ず何處より來るかと問ふ、そも〳〵何の用ありて然るかと。

□

師音吐朗暢、讀經の聲心耳に徹す。聽者おのづから信を發す。

□

師常に手まりをつき、はぢきをなし、若菜を摘み、里の子供と共に群れて遊ぶ。就中、師が地藏堂の驛を過ぐるや、其地の兒童必ず相追隨して、先づ「良寛さま一貫」と呼ぶ。師驚きて後ろにそりかへる。次に「良寛さま

二貫」と云ふ。師一層多くそりかへる。かくの如くして二貫三貫と順次其の數を増す毎に、師のそり反り方ます〳〵その度を加ふ。而して最後に後ろへ倒れんとするに至り、兒輩之れを見て喜び笑ふ。其の驛の長富取倉太幼年の頃余が家(解良家)に客たり。偶々師共に宿して云ふ、君が里の兒輩癖甚だわろし、以後そのことをなさしめざれ、吾老いて甚だ難儀なりと。余その側にありて云ふ、師何ぞ勞を忍びて其の如き戯れをなすの要あらんや、如かず自らなさゞるにはと。師答へて曰ふ、仕て來た事はやめられぬと。

こは一年人々の物をせり賣するを師立ち寄り見、あまりに聲高く物の價を呼ぶに驚きて後ろへそり反りし事あり、爾後この戯をなせしと云ふ。

□

師到るところに兒輩と群をなして戯る。何れの里にや、師その地の兒童と遊ぶによく死者の態をなして路傍に臥すを常とす。兒童或は草を以て之れを掩ひ、木の葉を以て之れを覆ひ、以て葬りの事に擬して笑ひ樂しむ。後に一狡兒あり、師が死者の體をなすや、指を以て師の鼻をつまむ。師もその久しきに堪へずして、自ら蘇生す。こは禪師自ら氣息を調べんが爲めになせし事ならんか。

□

師余が里牧ヶ花に托鉢す。甲の家の門に立つや、人それは半兵衞が家なりと云ふ。師ぬき足して去る。又その隣に至れば、おなじくこは半兵衞が家なりと云ふ。師又おなじくす。かくの如き十數戸、師つひに空しく去る。こは昔半兵衞と云ふもの醉狂して師をこらせしことあり、師ふかく半兵衞

の名を怖る、爾後人この戯をなすものなりと云ふ。しかも、師自らは半兵衛が家しかく多くあるべきかを疑はざるが如し。

□

禪師嘗て早苗とる頃余が家に宿す。狂僧に智海と云ふ者あり、驕慢こりて狂を發す、常に云ふ吾衆生の爲めに一宗を開かんと。而して自らを古への高僧に比し即今の僧徒を兒輩視す、かくの如きを以て彼常に良寛禪師の人に尊ばるゝを妬忌す。かの日彼大醉し、田を打つと稱して泥にまみれて余が家に來り、偶々禪師の余が家に在るを見るや、宿怒忽ち發し、敢て一言を交へず、濡るゝ所の帶を以て師を打たんとす。事不意に出づ、師又何の故たるを知らず。然りと雖身又避けんともせず。傍人驚きて抑へとめ、師をして一室に引き、狂僧をして去らしむ。其の日暮に及んで雨頻に降り出

づ、師室を出で、從容として問うて曰ふ、かの僧雨具を持てりしや、と又餘事を云はず。

□

余幼き頃三條の寶塔院に寓居し書を學ぶ。師も亦來り宿す。余俗にハリコロハシと云ふ物を持てり。師に對して云ふ。師我が爲に菅公の像を書け、若し肯んぜずば此のもの化けて夜師のもとに往かんと、師之れを見て恐るるものゝ如し。爲めに菅公の尊號と神詠とを書してたまふ、今なほ家にあり。

□

師に書を求むれば手習をして手がよくなりて後書かんと云ふ。時ありて興に乘じ數巾を掃ふこともあり。敢て筆硯と紙墨との精粗を云はず、自らの

詩歌を暗記して書す。故に脱字なり、大同小異ありて、詩歌の字句一定せず。

□

師草書を好む。懐素の自敍帖、佐理卿の秋萩帖等を學ぶと云ふ。國上の庵なは筆硯紙墨の蓄へありしと見え、手習の反古なども見うけられし事ありと云ふ。島崎に移りて後は紙筆もたくはへず、事あれば人の家に行きて書く。「きのふは御寺けふは醫者どの」と云ふは此の頃のたはむれ歌なるべし。

□

師が國上の庵に在りし時、爐の隅に小壺を置き、俗に云ふ醬油の實をその中に貯へ、食い餘るあれば皆此の壺中に投じ置き、夏日なほ之れを食す。

人至れば人にもすゝむ。人之れを食すに堪へずと雖、師は自若として臭穢を知らざるもの〻如し。師自ら曰ふ、蛆此の中に生ずと雖、之れを椀中に盛れば蟲おのづから逃げ去る、敢て食ふ事に害なしと。

□

余が兄妻を娶りし時、師古き扇子筥を持ち來り、祝ひの詞を述ぶ。余が祖父にや、師に向つてそのやうなる世間並の事を誰が敎へ申せしと問ふ。師答へて地藏堂の北川の妻が敎へしなりと云はれしとぞ。

註、北川、姓は富取、醫を業とす。

□

禪師又圍碁を好む。而も敗くることあれば不興す。何れの年にや地藏堂の長富取某と碁を對す。師多く勝つ。主人佯り怒りて曰ふ、人の家に客とし

て來りながら其の主人に勝つとは無禮も甚し、以後吾が家に來ること勿れと。師色を失ひて、其家を辭し歸途余が家に來り、意氣甚だ昂らず、何事か深く憂ふる所あるが如し。余が祖父その故を問ふ。師曰く、地藏堂の某に勘當されたるなりと。余が祖父曰く、そは甚だお氣の毒なり、我師の爲めに行きて謝せんと。明日相携へて某の家に到り、前日の無禮をわぶるに擬す。その間師門前に立ちて敢て入らず。事成りて後内より招けば、師はじめて入る。而も後直ちに又碁を園みしと云ふ。こは余が生前の事なれども故人觀國の語りしところなり。

註、觀國は國上村字溝古新清傳寺（佛光寺派）の住持なり。

□

師又錢などをかけて碁を圍むこともあり。人多く師に勝ちをゆづる。師錢

が多くなりてやり處なしと云ふ。又曰く人は錢の無きを憂ふれども、我は錢の多きを患ふと。

□

師平生喜怒の色をなさず、疾言するを聞かず。其の飲食起居舒にして愚なるが如し。

□

師の隨身の具、笠などに「おれがの ほんにおれがの」と書してあり。余が家に師の持ちたりし夢遊集あり、それにも「ほんにおれがの」と記しあり。

□

井上桐麻呂（初柳川に住す今則清に移る）師を尊信して常に國上の草庵を訪ふ。彼當時の善人

を師に問ふ。師余が父(解良叔問)を敎ふ。桐麻呂爾後余が家に住す。

□

師能く人の爲めに病を看、飲食起居心を盡す。又よく按摩をし、灸などをなす。人明日我が爲めに灸をせよと云ふ。師明日の事は又明日と答へて敢て諾せず。輕諾信少なきが爲めか、又生死明日を期せざるが故か。

□

師決して人を毀譽せず。然りと雖時ありて或る里長某居宅を造る甚だ壯大なり、師曰く貧すれば鈍すとはかくの如きを云ふなりと。

□

師嘗て風邪に感じ七日市某の家に臥す、明旦起きて見れば屏風にて床を圍む。師曰く、宜なり、我が病む事弘齋の屏風を立つればなりと。

□

師の嫌ふところは書家の書、歌よみの歌、又題を出して歌をよむこと。

□

師色紙短冊を出して書を求むる人あるも、詩歌隨意に書し、字行定法なし、當今和學者流の法のあることを知らざるものゝ如し。

□

師嘗て茶の湯の席に列りし事あり、所謂濃茶なり。師知らずに飲みほして見れば、次客席にあり。師やむなく口中含むところを碗に吐きて與ふ。其の人念佛を唱へつゝ飲みしと。之れ師みづから語りしところなり。

□

右と同じ席にてのことにや、師鼻くそを取りてひそかに坐の右に置かんと

す、右客袖をひく、左に置かんとす、左客又袖をひく、師止むことを得ずして再び之れを鼻中に置きしと云ふ。

□

師嘗て某の驛を過ぎ娼家の門に至るや、遊女あり走り出でゝ師が袖をひかへて泣く。師其の故を知らず。たゞ茫然としてなすにまかす。後に至りて其の故をたづねしに、そは彼の遊女幼にして身をひさぎて他郷に在り、父母の容形を知らず、しかも父母を思ふこと切なるの餘前夜父來ると夢み、師を見て其の父なりと思ひしが故なりと云ふ事明らかとなれり。此の話も師自ら語りしところなれども、余幼にして始終を詳かにせず。

□

師ある時托鉢の途中山の頂に憩ひし事ありしが、少憩の後再びもと來し道に行き托鉢せしに知る人ありこれ先刻の僧なりと云ふに、師驚きて歸り去りしことありしと。

□

師與板驛山田某の家に宿す。其家に一畫幅あり、獸を描く。師甚だ之れを珍愛し、一時人なきを見て、師自ら其の畫幅に對し畫中の獸の形容をなす。折から家婦人の來るあり。師曰く、我今何をなせしか君の知れりやと。婦人曰く師畫中の獸の態をなしたまへるにあらずやと。師驚きて曰ふ、君は賢き人なり、然りと雖、明らかにかくの如くなりと云ふことなかれ、奴婢が氣づかひをすればなりと。

□

毎年中元前後郷俗通宵踊りをなす、都て狂へる如し。師甚だ之れを好む。

ある夜師自ら手巾を以て頭を包み婦人の態をなし衆と共に踊る。人あり、その師なることを知り、傍に立ちて聞こえよがしに云ふ「この娘子品よし誰家の女ぞ」と。師之れを聞きて大に悅び、後人に誇つて曰く、我衆と共に盆踊りをなすや、人ありあれは誰家の女ぞと云へりと。

□

余問ふ、歌を學ぶ何の書を讀むべしやと。師曰く萬葉をよむべし。余曰く萬葉は我輩不可解と。師曰く解かるだけにて事足れりと。時に又曰く古今はまだよいが、古今以下不堪讀と。

□

師五十音の理を自ら考究して頗る其の旨を得たり。我地方未だ眞淵本居の書なし。師は先づ鞭をつくるものなり。余幼にして此の事を聞く。師示す

に活用を以てす。先づ初言を、次に體用令助を云ふ。自ら心に得ざれば師は默して語らず。其の理を心に自得して後、師又語らる。惜哉余淺膚にして其の要を學ばず、今日に至りて臍を嚙む。師曰く我一冬草庵にあり五十音を考へ其の大旨を得たりと。

□

師國上の草庵に在し時、筍厠中に生ず。師蠟燭を點して屋根を燒き竹の子を伸ばしやらんとす。しかも、その爲めに却て厠を燒失しけりと。

□

人曰く金を拾ふは至つて樂しと。師之れを聞き自ら地上に金を捨て、やがて自ら之れを拾ふ、更に情意の樂しきなし。初め人吾を欺くかと疑ふ。捨つること再三、つひに其の在るところを見失ふ。師百計してやうやく拾ひ

得たり。その時に至つて初めて樂しきを知る、且曰く人我を欺かずと。

□

郷言稻の豐熟するを「ぼなる」と言ふ。ぼなるは吼なると云ふなるべし。師之れを聞き、稻の吼ゆるを聞かんと終夜田間に彷徨せられしことありと云ふ。

□

夏夜、田家にては厩に藁をつかねたるを縄を以て梁下に吊し下ぐるを例とす。之れ蚊子の馬を刺す事あれば、馬之れに觸れて蚊子を追ふが爲めなり。師之れを見、その故を問ふ。人之れ蚊を去るの法なりと教ふ。師卽ち草庵に歸りて自ら之れをなし晏如たりしと云ふ。

□

師一日雨に逢ひ石地藏の笠着たる傍に立ちて凌ぐ。人師なることを知り、伴うて家に歸り、而して書を求む。師卽ち「いろはにほへと」の歌を十二枚に大書すと云ふ。

□

新潟町飴屋萬藏といふもの、師の書を信じ其の家の招牌を書き貰はんことを欲し、一日紙筆を携へて師を追ひ、地藏堂の驛某の家にて師に逢ひ、懇願してつひに其の所欲をかなへしと云ふ。師此の日人に語つて云く、吾今日厄に逢へり云々と。余今年新潟を過ぐ、其の家なほ禪師の招牌をかゝぐ。當時を追想して獨徘徊したりき。

□

盗あり、國上の草庵に入る。一物の盗み去るべきものなし。密に師の臥蓐

をひきて奪はんとす。師寢て知らざるもの〻如くし、自ら身を轉じてなすがまゝにまかしたりきといふ。

□

醫師正貞と云ふもの(原田正貞)あり、師に問うて曰く、吾金を欲す如何にせば金を得べきかと。師曰く業を勤めて人の手元を見ることなかれと。更に他の人同じき道を問ふ。師答へて曰く、金を人に借ることあらば其の期をたがへずに返すべしと。

□

師余が家に信宿を日を重ぬ。上下おのづから和睦し、和氣家に充ち、歸り去ると雖數日のうち人自ら和す。師と語る事一たびすれば胸襟清きを覺ゆ。師更に内外の經文を說き善を勸ひるにもあらず、或は厨下につきて火を焚き、或は正堂に坐禪す。其の話詩文にわたらず、道義に及ばず、優游として名狀すべき事なし。唯道義の人を化するのみ。

□

師嘗つて日蓮宗の家に宿し看經せしに家人袖をひきて頻りに止めよと云ひしと、師みづから語られしことありき。

□

師が平生の行狀詩歌中に具在す。今又こゝに贅せず、たゞ其の逸事を錄するのみ。師一生奇行異事の人に云ふべきなし。唯一事あり。そは師死して後、棺に納め日を重ぬ。尼某來り、哀痛の情に堪へず、一たび死者の風姿に接したしと哀願す。人々止むことを得ずして棺を開き見しに、頂骨不傾嚴として生けるもの〻如かりしと云ふ事之れなり。

□

師神氣内に充ちて秀發す。其の形容神仙の如し。長大にして清瘦、隆準にして鳳眼、溫良にして嚴正、一點香火の氣なし。余牆高くして宮室の美を知ることなし。今其の形容を追想するに當り、一の似たる人を見ず。鵬齋曰く喜撰以後此の人なしと。

□

師嘗て余が里觀照寺にありしことありと雖、余幼くして知らず。

□

坡丈と云ふものあり、俳諧歌者なり。自ら拙書を歎ず。師之れを聞きて曰く、妍媸に心を勞することなかれ、書自ら成らんと。坡丈之れより字を書くに易きを得たりしと。其の徒若水語る。

□

師初め他州に雲水し、後國上の五合庵に住し、又同村乙子の宮の庵に住む。老いて後島崎の里能登屋某と云ふものゝ家の後ろに住む。蓋し國上を去りしは薪水の勞を厭うてなるべし。

□

土佐にて江戸の萬丈と云へる人師と一宿を共にせしと、その時のこと萬丈の筆記にあり。

□

此の數條思ひ出づるにまかせて筆記す、年歴次序なし。

□

師佛に入るその初めは如何なる故なるを知らず、釋遍澄に問ふべし。

□

筍盗の話
イマシメ玉
歌詩の語
見義所持屏風の話
文臺先生とはれし話
鵬翁贈答の詩歌
水原角麸の話

（「良寛禪師奇話」の最後はかくの如く題目だけを七つ並べてあるまゝに終つて居るが、筆者は後日なほ書きつゞけるゝ爲めの用意にこんな事をして置いたのだと思はれる。）

十、良寛の眞生命

云ふまでもなく、良寛は一個の隱遁者であつた。しかも北國邊土の一隅に彼自身の所謂「山かげの石間をつたふ苦水のあるかなきかに」生れ且死んだ一個の心身脱落者に外ならなかつた。極端に云へば、彼の如きは實に一個の憐れむべき敗殘者、爲すなき逃避者に過ぎないのである。而もなほ斯の如き韜晦的、隱遁的、囘避的生活裡に沒頭してゐた彼の如き人格と其の藝術とが、今日の吾々の心胸にしかく切實なる響を傳ふると云ふのは、そも〳〵これ何故であるか。

襤褸又襤褸、々々是生涯、食裁取路邊、家實委蒹葭、看月終夜嘯、

迷花言不回、自一出保社、錯爲箇駑駘。

○

生涯懶立身、騰々任天眞、囊中三升米、爐邊一束薪、誰知迷悟跡、何問名利塵、夜雨草庵裡、雙脚等閑伸。

○

夕顔も糸瓜も知らぬ世の中は
たゞ世の中にまかせたらなむ
霞立つながき春日を子どもらと
手まりつきつゝ今日もくらしつ

○

「焚くほどは風がもて來る落葉かな」、一見何と云ふたはけ方であらう、何と

云ふ退嬰的生活であらう。しかも、かうした人格が、今日——此の進歩的な、發展的な、奮鬪的な、積極的な、攻取的な、活動的な趨勢の高潮期にあると稱せられる今日に至つて、特に驚くべき多くの讃嘆者を得つゝあると云ふのは、全く何と云ふ不思議な矛盾であらう。

今日良寛の光輝がしかく弘い世間に認められるに至つたのは、良寛その人の人格は兎に角その詩と歌と書との非凡な力によるのであると思ふ人があるかも知れない。しかし、彼みづからは「自分に三つの嫌ひなものがある、それは詩人の詩、歌人の歌、書家の書、及び料理人の料理である」と云ひ、又「孰謂我詩詩、我詩是非詩、知我詩非詩、始可與言詩」と云つてゐる如く、良寛の藝術は決して普通人の所謂藝術ではなかつた。彼れの藝術は——詩も歌も書も——凡て之れ良寛その人の人格の表現に外ならなかつたの

である。良寛の詩も歌も書も、凡てかれの人格と生活とを外にしては、到底あり得なかつたところのものである。隨つて、良寛の藝術に對する尊崇は、同時に良寛その人の人格と生活とに對する尊崇でなければならず、彼れの藝術から受けるところのものは、悉く彼の人格と生活とから受けるところのものに外ならぬのがある。

こんな風に考へて來て更に今日の如き所謂活動的、奮鬪的、進取的な社會に於て、良寛の如き極端に無爲な、逃避的な、退嬰的な人格とそれの表現としての藝術とが、しかく異常な讃嘆を博しつゝある現象について考がへると、吾々はあまりにその矛盾の甚しいのに驚かないではゐられぬのである。しかし、これは決して單にかの土中に永く隱されたる寶玉が偶々或機會に於て發掘せられて、突如人目を驚かすと云ふやうな偶然事と同一に論ず

べき事ではなくして、極めて必然的な、極めて内的な意義の根柢を有する極めて貴い事柄に屬しはしないだらうか。良寛のそれの如き人格乃至藝術が現代の如き社會に於て一層それの光輝を增し來ると云ふ事は、まことにこれ謂ふところの「無用の用」に外ならぬ。而も此の「無用の用」の奥に吾々は現代の生活そのものにとりての最も重大な何ものかの暗示を探り得ないであらうか。そも〳〵現代の人心が良寛に求むるところのものは何であるか。良寛が現代の人心に與ふるところのものは何であるか。此所謂「無用の用」の根柢に嚴として存する何ものかの意義を――其不可說の意義を攫得することが私達にとりては更に〳〵重要な一大事ではないだらうか。云ふまでもなく良寛は一個の僧であつた。しかも彼は決して謂ふ所の救世者でもなく、說敎者でもなかつた。彼の世に出たのは、かの所謂田沼

時代を以て稱せられる德川幕府政治の腐敗の殆ど絶頂に達した時であつた社會生活の狀態から云つてもかの文化文政期前後の人心の頽廢その極に達したと云つてもいゝ時であつた。而も一方に於ては斯くの如き時勢に處すべく餘りに清きを愛し、正しきを愛する少數の人々がなくてはならなかつた。而して夫らの人々の或者は謂ふ所の勤王の志士となり身命を犧牲にして革新の任に當らうとした。彼の父以南の如きも正に其一人であつた。又或者は聲を大にして人道を叫び、正義を說いた。更に又或者に至つては自らの弱さのあまり絶望的自棄に墮し、世をも身をも冷眼視し、市井裏に隱遁して茶化嘲笑のうちに一生を終つた。わが良寬も亦かくの如き少數の淸く正しき人の一人であつた。しかも、彼は出でゝ戰ふべくあまりに弱く、冷眼を以て笑ふべくあまりに溫かく且純であつた。弱かつたが故に彼は身

を退けた。しかし、それと同時に彼は溫かゝつたが故に、世を忘れ生を忘れることは出來なかつた。かくて、一旦はたゞひとへに世を逃れ、身を退けた彼も、いつとはなしに世間の墮落に對する嘆きと人生の無常に對する悲しみに動かされ、救世の大願を以て立ち、衆生濟度の理想を以て動くやうになつた。けれどもさうした道を進むに隨つて、再び彼はみづからの弱さの爲めの苦しみと惱みとをます〳〵激しく感じないわけには行かなかつた。そして幾度か起ち、幾度が躓いた果に、彼はつひに一切を否定し、あらゆるものに對して空觀をいだくより外に仕方なき境地まで行つた。しかもその一切否定のどん底から、彼の前に始めて廣大な天地が開けた。弱きに徹して彼は强さを得た。一切を否定することによつて彼は始めて自己の生の無敵を知り、自己の生に對する本當の愛着を感じた。外に向つて居た

彼の眼は、爾後專ら自己の內部に注がれるやうになつた。世を救はうとしてゐた彼は、一轉してたゞひとへに自分一個の救ひを求める彼となつた。自分一個の救ひ――それが同時に萬人の救ひであると信ずる彼となつた。自分一個を生かすこと――それが同時に萬人を生かすことであると信ずる彼となつた。佛典の所謂「人自ら意を伏すること能はずして反つて他人の意を伏せんと欲す、能く自らの意を伏せば他人の意おのづから伏すべし」(三慧經)――その道へ彼も進んだ。かくて一切否定は同時に一切肯定であつた。凡てから離れることは、同時に一切を得ることであつた。彼はつひに凡てを失うて凡てを得るの道に進んだ。かくの如くして極めてうぶな、極めて自然な、心持で營まれたのが、實に良寛の一生であつた。

世を捨てゝ身を救ふ人もますものを

草のいほりにひまもとむとは

墨染のわが衣手のひろくあらば

まづしき人をおほはましもの

時にはかう自らを責める事があり、又時には農家の繁忙期に自ら農夫作業の圖を畫いてそれを床に懸け供養禮拜怠らなかつたと云ふ程に自らを責める事のあつた彼ではありながら、しかも根柢に於て彼の心は安らかに彼をして彼みづからの道を歩ませたのであつた。

隨つて良寛は決して世の所謂宗敎家ではなかつた。各宗に亘つてあれ程學問の競起した時代はないと云はれるのが良寛當時のわが佛敎界の狀態であつた。又各宗に亘つてあれほどの政府の優遇を受け、あれほどの權力を持たされた時代はないと云はれるのが、その當時のわが佛敎界の狀態であつ

た。しかも、かくの如く宗門や寺院や、教權の勢力の盛大であつた時勢に生れ合せながら、わが良寛はそうした傾向とは全く反對な中古的とも稱すべき隱遁獨行の道へと進んだのであつた。

我見講經人、雄辯如流水、五時與八敎、說得太無比、身稱爲有識、
諸人皆作是、却問本來事、一個不能使。

○

佛敎十二部、部々皆淳眞、東風夜來雨、林々是鮮新、何經不度生、
何枝不帶春、識取此中意、莫强論疎親。

かうした自由な天地に探り入つたのが良寛の求道であつた。隨て彼が生涯親しく出入してゐた家は、神道、日蓮宗、淨土宗、淨土眞宗、眞言宗等殆んどあらゆる宗旨を網羅してゐると云つてもいゝ程であつた。彼には宗旨

の別などは眼中になかつた。人々も亦自家の宗旨などを別にして彼を尊崇した。それは彼が禪宗に屬しながら淨土眞宗の家で死に、同じ宗旨の寺に葬られてゐる一事でも知られるのである。而してかくの如く宗旨の別などを眼中に置かなかつた彼は、同時に何人に向つても宗義を談じたり、經典を講じたり、法を說いたり、道義をすゝめたりするやうな事は、殆んどなかつたと傳へられてゐる。此の點の如きは、良寛が最も鮮かに、世の所謂宗敎家と選を異にしてゐた點である。良寛は實にかくの如く他人の前に經を讀まず、法を說かず、道を談ぜざる點に於て、謂ふところの宗敎家ではなかつた。

けれども、今日なほ傳へられるところの多くの逸事逸話の示すところによつて明かなるが如く、良寛の生活はかの鈴木文臺の言の如く實に「かの道

徳の深邃の如きは我徒の窺ふ所にはあらざるなり」と云ふ程度まで到入してゐたのである。而して彼の赴くところ常に不可思議な道徳的感化の及んだ事が、今日なほ歴々として窺ひ得るのである。破笠衲衣の一貧老僧が飄然として去來するところ、到るところの町、到るところの村、いたるところの家、そこには常に不可思議なる和らぎと歡びとが薫風の如く漂よふたと云ふ――これは又何たる奇蹟に似た事實であらうぞ。

而もその人みづからは實に弱き自己に徹して、ひたすらにおのれ一人の救ひを求めてやまなかつた、むしろ憐れむべき一個の隱遁者に外ならなかつたではないか。而してその人の今日私達に遺した藝術の凡てと雖も、正にさうした生活、さうした人格そのものゝ表現に外ならぬのではないか。『彌彦神社附國上と良寛』の著者小林粲樓氏は云ふ「彼れ曾て法華の序品に題して曰く『如是兩字高着眼、百千經卷在這裡』と……（中略）：　近代の碩徳原坦山は良寛の此頌に對し矍然として『我朝佛學の蘊奥を究めしもの空海以下唯此人あるのみ』といふ、眞に潦倒者にして始めて潦倒者を知ると言ふべき也」と。更に云ふ「要するに彼れは『如是』の衲僧のみ、彼を説明するには當年の彼自身ならざる可からず」と。果して然るか、果して然るか。

併し私は重ねて自ら問はう。現代の人心は良寛に向つて何を求めなければならぬか。そも〳〵又良寛が現代の人心に向つて與ふるところのものは何であるかと。

大愚良寛畢

良寛遺跡巡り

良寛遺跡巡り

大正六年七月九日——

午前九時四十五分糸魚川發の汽車で、私はいよ〳〵良寛遺跡めぐりの旅に上つた。雨あがりの空は氣持よく晴れ渡つて居た。北日本アルプス連山の雪をいたゞいた頂も、今日は一きは空高く聳えてゐるやうに見えた。近く突立つた山々までが、今日は何だか思ひ切り背伸びしてゐるやうに見えた。海も至つて穏やかであつた。海の方から汽車の窓へそよ〳〵吹き込んで來る風が、かなり永い間身内に立ち籠もつて居た惡暑さをからりと拂ひ去つてくれたやうに思はれた。私の心全體に靜かな亢奮が漲り渡つた。

午後一時何分かに柏崎驛で私は近頃全通したばかりの越後鐵道に乘りかへた。こゝから先は私には全く未踏の地であつた。海に沿うて幾重も重なつて長く〳〵續いた小山つゞきと云つても好いほどの高い砂丘、その砂丘一面に幾里もの廣さに亙つて林をなしてゐる枝ぶりの奇怪な黑松、汽車の進行につれて時々それらの砂丘の一寸した絕え間からチラリ〳〵と見える海の色、所々に群をなして高く突立つてゐるロータリー式の石油井——さう云つたやうな風致を示してゐる中越地方の自然は、同じ越後の國に生れ育つた私にも、妙に異國的な感じを與へた。此のあたりからはもう頸城地方で見るやうな高山は見えないで、樹木の多い小山のつらなりが到るところで狹い平地の眼界を遮つてゐた。

やがて私の耳に「出雲崎」と云ふ驛の名を呼ぶ聲が一種特別の響きを與へた。私は慌てゝ立ち上つて窓をのぞいた。出雲崎と云へば、良寛出生の地として私の久しく想像に描いて居たところであつた。初めの計畫では、私の此の旅行で第一に立ち寄るべきところは此の町であつた。しかし、つひ近頃此の町は火災に罹つて大部分燒けてしまひ、町のうちがまだ何かとゞた〳〵してゐると云ふので、此の町へ立ち寄ることはやめにしたのであつた。

停車場の光景には他と比較して何等の變化のあつたのではないが、私の胸にはたゞならぬ波動が感じられた。停車場のうしろはすぐ樹木の多い小山になつて居て、かなり廣い道がその裾をめぐつて通じてゐた。出雲崎の町はその小山を越えて、更に一里近く道のりを隔てた海岸にあると云ふことであつた。私はすぐ私の眼の前に立つてゐる小山の彼方の日本海を想像し

た。その岸に沿うてつくられた小さな港町の燒跡を想像した。その町から望んだ佐渡の島山の眺めを想像した。「佐渡と出雲崎やすぢかひ向ひ橋をかけたや……」と昔から歌ひ傳へられた民謠がおもひ合はされた。「荒海や佐渡に横たふ天の河」と此の地で詠んだ名高い芭蕉の句もおもひ合はされた。

たらちねの母がみ國と朝夕に佐渡がしまへをうち見つるかな

足乳根の母のかたみと朝夕に佐渡の島根をうち見つるかな

いにしへにかはらぬものはありそみのむかひに見ゆる佐渡が島なり

天も水もひとつに見ゆる海の上に浮び出でたる佐渡が島山

かうした良寛その人の歌もおもひあはされた。そして出發する前から私の内部に漲つてゐた靜かな、嚴肅味を帶びた一種の亢奮——此の旅の目的に

伴うた心の亢奮が、刻々に熱度を加へて行くやうに感じられた。そしてその心の亢奮は、汽車がいよ〳〵私の目ざす西蒲原郡の平野——私はこれまでにこんなに平らな廣い土地を見たことがない——へ出て、突如としてその平野の入口の、すぐ眼の前に高く聳え立つた彌彦山の端麗な姿を望んだ刹那に、われながら不思議なほどの高調に達した。全國にたぐひの少ない此の平野の門戸に、しかも日本海の岸近くに巍然として立つて居る此の山は、まつたく何と云ふ端麗な姿を備へてゐることであらう。その輪廓をなしてゐる線は、何と云ふ柔かみと溫かみとを持つてゐることであらう。

「ももつたふいやひこやまを、いやのぼりのぼりて見れば、たかねにはやくもたなびき、ふもとにはこたちかみさび、おちたきつみをとさやけし、こしぢにはやまはあれども、こしぢにはみづはあれども、こゝ

をしもうべしみやゐとさだめけらしも。」

かうした良寛の嘆美は、したしく其の山に登つた者でなければわからぬが、しかし私にはむしろかうして平野から仰視した其の山の風姿が、太古このかた此土地に住む多くの人の心を引きつけたのではないかとおもはれた。かうした彌彦山の英姿に見入つてゐた私の眼は、やがてその山と相並んで立つたゆるやかな圓味のある輪郭を持つた、それよりはずつと低いが、しかし矢張高山の趣を備へた他の一つの山に轉じた。それが卽ち良寛の最も永く住んでゐた庵の跡のある國上山であつた。

「あしびきの國上の山の、山かげに庵をしめつゝ、朝にけに岩の角みち、踏みならしい行きかひらひ、まそかゞみ仰ぎて見れば、み林は神さびませり、落ちたきつ水音さやけし、そこをしも綾にともしみ、春べには花咲きたてり、皐月には山時鳥、うちはふり來鳴きとよもし、長月の時雨の雨に、もみぢ葉を折りてかざして、新田實の年の十とせを過しつるかも」

時にかう歌ひながらも、なほ且心の奥ふかく限りなき寂寥と悲哀とを藏してゐた五合庵時代の良寛、「老軀多病薪水に便ならざるの故を以て」と傳へらるゝ理由の半面に蔽はんとして蔽ひがたき人間のなつかしさを以つてして、しかもなほ全く人里の裡に下り得なかつた乙子祠畔小庵時代の良寛—さう云たやうな故人の俤をさま〴〵に心に描きながら、私は西日の光のまぶしく射し込む汽車の窓にもたれて、しみ〴〵と其の二つの草庵の遺跡を持つた山の姿に眺め入つた。彌彦山を眺めた時私の心に感じられた神々しさの感が、今かうして國上山を望むに及んで、いつしかそれは人間的な

懐しみの感じと變つてゐた。私は又その山の裾をめぐらしてゐる小山のつらなりをも見た。更に又その山を起點として前面に展開された平坦々たる緑の平野を眺めまわした。その平野のそちこちに散在する森や村を眺めた。私の心にはいつしかゝの山と此の平野との間を、いつもたゞ獨りでさまよひ歩いてゐた一人の老隱者の衲衣破笠のさびしげな姿が描かれてゐた。

良寛がいほりの跡のくがみ山仰ぐわが目にしむ涙はも

たゞこゝまで來て私がやゝ意外に感じたことは、彌彦と云ひ國上と云ひ、角田と云ひ、又それらの高い山の麓をめぐつてゐる小山と云ひ、凡ての山の輪郭の線の感じが、私の郷里附近のそれとはちがつて、北國の山とは思はれぬほどの柔かみを持つてゐること、眼前に展開された平野の感じが底に云ふばかりなき淋しみを藏してゐるらしくして、しかも見渡したところ

稀な穏やかさと豊けさとを示してゐること、北國と云ひながら北に高い山——彌彦、角田國上皆然り——を持つて居り、隨てそれらの山の面がいづれも日に向つてゐることなどであつた。私はこれらの特色のうちに、不思議にも一種の南國味の加味されてゐることを思はないでは居られなかつた。そしてそれと同時に私は嘗てある人が良寛の書を讃美して日本海の怒濤の氣分を持つてゐることを云ひ、又ある人が良寛の性格のうちに同じくさうした要素の多分にあることを云つたのを讀んだ場合に感じた私の疑問が、今かうして目のあたり此の地の自然を見るに及んで幾分解決の緒を見出したやうに思はれた。

こんな事を感じたり、考へたりしてゐるうちに、汽車は私がこゝ暫くの宿りを求めることになつてゐる巻町に着いた。そして私はこの度の旅行の目

的に向つての最も力強いたよりとしてゐる松木德聚氏を其の假寓たる越中屋と云ふに訪ねた。早速旅裝を解いてしばらくさま〳〵の雜談を取り交はしてゐたがいつの間にか話は良寛のことに移つて行つた。そして私が湯に入り、松木氏と共に夕食をしたゝめてゐるうちに、もう此の家の主人は良寛の詩稿を表裝して小さな掛物としたものを持ち出して床にかけてくれた。それは『圓通寺』以下數篇いづれも私の記憶に存してゐる旅の詩を楷書の細字で書き列ねたものであつた。そんな事で話はます〳〵佳境に進んだ。しまひには宿の主人も一緒になつて話し込んだ。松木氏とはずつと以前から幾度となく良寛についての話を取交はして來たから左程驚きもしなかつたが、宿の主人の熱心にはひどく驚かされた。宿の主人はこんな事を云つた。

「良寛さまのことなら——此の邊の者は大概良寛さま良寛さまと云ひます。良寛と呼び捨てにする者はあんまりありません——此の邊の者は誰でも知つてますし、又何かにつけて良寛さまについての面白い話をしたものです。尤も詩とか歌とか書とかについての知識は別ものですがね」

やがて同じ家を假寓としてゐる此の郡の視學の稻葉氏と云ふ人がやつて來て、矢張いつの間にか良寛談の仲間入をした。

「良寛禪師の感化は實際意外なほどですが、しかし若い者なんかには「焚くほどは風がもて來る落葉かな」と云ふあの有名な句を、妙に曲解して自分達に都合のいゝ口實に使つてゐる手合もありますよ」

これは稻葉氏の話であるが、教育者はさすがに教育者らしい觀察をするものだと思はないでは居られなかつた。

宿の主人は所々へ出あるく機會の多い自分の道樂半分の商賣を持つてゐるので、所々で聞いて來たさま〴〵の逸話を知つてゐた。それをつぎ〳〵に思ひ出すまゝ私に話してくれた。中には隨分牽强附會らしい話もあつたが、それでもかなり興味深い事實談らしいものもあつた。わけても面白いと思つたのは文化七年に江戸の龜田鵬齋が國上山の五合庵を訪ねた時の話であつた。鵬齋は隨分永く越後に居たと云はれる。そして彼の草書は良寛について學んだものだと云はれる。彼が國上山の五合庵を訪れたのは、或る秋の晴れた日であつた。折からの秋景色を賞しながら、彼はたど〳〵と國上の山坂をのぼつて、良寛の庵に着いたのは日ぐれ方であつた。幸ひ良寛は庵に居た。そして鵬齋の姿を見ると早速大きな擂鉢を一つ持ち出して來た。鵬齋はひどく不審に思つて、その擂鉢を何にするのだと訊ねた。良寛は

お前樣は大分足が汚れてゐる樣だから之で洗つてはどうだと云つた。「之は擂鉢ではないか」と鵬齋が云つた。「擂鉢にも使ふが足を洗ふ事も出來る、何しろこゝには之より外に何もないのだから之で洗ひなさい」と良寛が答へた。鵬齋はやむを得ず其通りやつた。それから上へ揚つていろ〳〵と話をしてゐたが、鵬齋はやがて酒が飲みたくなつたと云つた。良寛はこゝには酒の有り合せはないが、麓の村まで行けばあるから買つて來ようと云つた。鵬齋はそれは大變だと思つたが、矢張飲みたいので、それでは買ひに行つて來てくださるかと云つた。良寛はよしとばかりに古びた德利をぶら下げて出かけた。鵬齋は一人居殘つて待つてゐたが、そのうち日が全く暮れて、いつしか月が高く昇る時刻になつた。初めのうちこそ何でもなかつたが、時刻がたつにつれて鵬齋はたまらない待ち遠ほしさと、つひにはやりどこ

ろのない淋しさをさへも感じ出した。しかし、いくら待つても良寛は歸つて來なかつた。鵬齋は堪へ切れなくなつて草庵を出てあたりをぶら〳〵歩きながら月でも眺めて、せめて心をまぎらさうとした。と、見るともなく見ると、とある大きな松の樹の根元に人間らしい者の居るのが目に留つた。いくらか薄氣味惡く思つたが、鵬齋はその方へ近寄つて行つた。そしてよく見るとそれは良寛その人で、丁度松の根元に腰を下ろして、しきりと月を眺めてゐるところであつた。鵬齋はいきなり「そこに居るのは良寛さんぢやないか」と訊ねた。その聲に應じて良寛は「どうです、いゝ月ではないか」とさも感じ入つたやうに云つた。しかし鵬齋はそれには答へずに酒はもう買つて來たのかと訊いた。ところがそれを聞くと同時に、良寛は彈ね出されたやうに立ち上つて、地べたにころがしてあつた德利を取り上げる

や否や「や、忘れて居た、これから行つて來る」と云つて驅け出した。

宿の主人から聞いた話に今一つ面白いのがある。それは松野尾と云ふ村の飴屋某が持つて居た良寛の書の二幅對の掛物についての話である。その飴屋へは良寛は時々遊びに行つたと云ふ事だ。ところがある日飴屋の主人は良寛に向つて揮毫を求め、更にあなたの字はむづかしくて誰にも解らんから今日は解るやうに書いてくれと云ふ註文を出した。良寛は「よし〳〵」と云つた。そしていよ〳〵書いてくれた字を見ると、それは「一二三」と云ふのと、「いろは」と云ふのゝ二枚であつた。書き終つてから良寛は云つた。「これなら振假名をしないでも解るだらう」と。此の二幅對の書幅は、今では同じ村の山賀五兵衛と云ふ人が秘藏してゐるとの事である。

○

七月十日

朝早く松木氏に連れられて、私達の宿のつひ近くに住んでゐる此の郡の郡長小山龍作氏所藏の良寛の筆蹟を見せてもらひに行つた。詩を書いたもの數點あつたが、中で最も珍らしく感じたのは自畫自賛の布袋であつた。良寛の畫は幾つもあると云ふ事を前から聞いてゐたが、私の見たのはこれがやうやく二つ目であつた。畫はとり立てゝ云ふほどのことはないが、その布袋の賛は良寛の面目の躍如としたものであつた。他は惠比壽大黒が地上に坐つて話をしてゐる誰れかの畫に賛をしたもの、この賛も特色的なものであつた。その日は又た同じ町の内木氏所藏の三四點をも見せてもらつた。いづれも詩で、しかも詩集中に收められてあるものであつた。

此の日も到るところで良寛の逸話を少なくとも二つ三つ位づゝ話された。

さほど耳新らしいものはなかつたが、話す人々がいづれも皆眞面目な態度で、しかも深い興味を以て話す一事は、今更ながらうれしく且ゆかしい事に思はれた。

○

七月十一日

此の日は終日他に忙しい用事があつた爲めに、良寛に關する話を聞く事も出來ず、又筆蹟を見せてもらふ機會もなしに過ぎた。

○

十二日

朝新潟へ行き、舊友齋藤樹蔭、藤井落葉二氏を訪ね、始めて此地の歌人小金花作氏に遇ひ、午後熱心な良寛研究家として古くから其の名を知られた

小林二郎翁を訪ねた。越後に生れながら新潟の地を踏んだのは今回が初めてゞありながら、私の心はたゞ一すぢに小林翁の許にのみ走つてゐた。齋藤氏に伴はれて翁の家を訪ねると、幸ひ翁は在宅中で既に與板町の藤井界雄師からの紹介もあつたと云つて歡んで私を迎へられた。うち見たところ翁はもう八十近い高齢のやうに思はれたが、體格はいかにもしつかりして居られ、顔面には稀に見る福德圓滿の相を備へて居られた。先づ階下の茶の間らしい一室に案内されたが、その部屋へ入るや否や良寛のかの有名な

鉢のこをわがわするれどとる人はなしとる人はなし鉢の子あはれ

の一首が額に仕立てゝ高く掲げてあるのが私の眼にとまつた。やがて階上の客間へと招じられたが、そこには眼にとまるもの悉く良寛と云つてもいいほど多くの筆蹟が、或は額にし或は柱懸けとし、或は軸物としてかけ集

められて居た。それらの筆蹟について一々翁の説明を求めた上で、私は翁が良寛研究を始められてから幾年ぐらゐになるかを訊ねた。翁は小さな聲で「もう四十年あまりになります」と答へられた。やがて翁はどこからか良寛の筆蹟の復寫を二枚取り出して來て、これを上げますと云つて差し出された。一枚は卷紙幅に裁つた唐紙に刷られた良寛の書翰であつた。そしてその文句は次の如きものであつた。

「地しんは信に大變に候野僧草庵は何事なく親るい中死人もなくめて度存候

うちつけに死なばしなずてながらへて
かゝるうきめを見るがわびしさ

しかし災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候死ぬ時節には死ぬがよ

く候

是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候

かしこ

良　寛

臘八

山田杜皐老

與　板

今一枚の方は楷書で謹んで書いたものらしく、文句は佛遺教中から日常生活の心得を抜き書きしたもので、最後にそれを勸奬した良寛自身の言葉が添へ書きしてあつた。小林翁の話によると、これは以前翁が秘藏されてゐたのであるが、後大阪の某氏の懇請にまかせて讓られたもので、今ではその

の大阪の某氏が堂を建てゝそれを納め守り佛のやうにして居られるとの事であつた。

それから翁は手づから秘藏の良寛筆蹟をつぎから次へと數十點の多くを出して見せられた。そして一つ毎に翁自身情味のある聲で朗吟して聞かされた。詩、長歌、短歌、殆んどあらゆる種類のものがあつた。私は翁の感興に堪へないと云つた風な樣子と、良寛の筆蹟とを見比べながら、たまらない感激に撲たれた。ある時には我知らず眼のうるむことさへあつた。わけても

「よひ〳〵に霜はおけどもよしゑやしあられはとけぬとしのはに雪はふれどもよしゑやし春日にきえぬしかすかに人のかしらにふりつめば、つみこそまされあらたまのとしはふれともきゆとはなしに」

の一首を朗吟された時の小林翁の顔面には、何とも云つて見やうのない情感の現れがあつた。

みづとりのかものはの色のあをやまの
　こぬれさらすてなくほとゝぎす
さよなかにほらふくおとのきこゆるは
　をちかた里にほ(火)やのぼるらし
くさのいほに足さしのべてをやまだの
　かはずのこゑをきかくよろしも

等をはじめとして、歌にも詩にもこれまで讀んだおぼえない佳い作もかなりあつたが、それらは後で別に寫させて貰ふことにして、最後に小林翁が

最も大切にしてゐられるらしい六尺屏風二双に詩と歌とを書いてある、最も代表的な良寛の筆蹟を見せて貰つた。私はこれまで良寛の詩や歌や人格に對しては、隨分とはげしい崇敬の念を持ち、多少の理解を持ち得て來たとは思ふが、書については一向に無智であつた。それが斯うして目のあたり多くの代表的な筆蹟を見せてもらつて居るうちにいつしか私の眼がこれ迄知らなかつた新らしい世界に向つて開けて來たやうに思はれた。書の技巧上のテクニックの事は私にはわからないけれども良寛の書が彼の歌や詩に於けると同じく彼自らの力強い表現である事が理解された。私の心には彼の書を通じて、彼自身の崇高な超越的人格が、さながらに表現されてゐるのが見えるやうな氣がした。しかも、彼の書の一枚一枚に、それを書いた時々の彼自身の氣分の變化が、鮮やかに現はれて居るのが感じられた。

良寛の書に對して居ることは、良寛の書いた字に對してゐることよりも、むしろ良寛の内部の「人」に對して〻あるやうに感じられた。私はこれまでにこれほど全人格的な、即ち藝術的な字を見たことがなかつたやうに思ふ。この新らしい世界を私の前に開いてもらつた〻けでも、私は小林翁その人に深い感謝を捧げなければならぬわけである。

こんな風にして、小林翁の許で、私は三時間餘を過した。しかし、私自身とにかく、非常の暑さの中で老體の翁をかうして煩はすことがひどく濟まないやうな氣がしたので、私は離れがたない思ひに引かされながらも、やがて暇を告げることにした。小林翁はあまり多くを語る人ではなかつたが、言葉少ないうちにぽつり〳〵と話してくだすつた良寛その人の藝術や人格についての翁自身の知識や感想の斷片の多くは、翁その人の人柄から

受けた感銘と共に、私には得難い心の寶であつた。

辭して階下に下りると、翁は再び先刻の茶の間へと私を呼び入れて、最後に良寛の念持佛であつた小さな觀音の木像と石地像とを佛壇の中から出して示された。そして觀音像には良木といふ作者の銘があり、石地藏は與板のある石屋の刻んだものだと云ふことをも話された。しかし、私にはその場合彫刻者の誰であるかと云ふ事や、彫刻の藝術的價値と云ふよりも、むしろそれが良寛その人の信仰の一つの表象として、その二個の佛像が一段と崇嚴に感じられた。私は襟を正して禮拜せずには居られなかつた。

小林翁の許を辭して、再び落葉氏を訪ね、伴はれて新潟市の一角を三十分ほどの時間を費して見物してから信濃河畔のとある家で夕食を喫し、直に又西蒲原地方へと引き返した。

七月十三日　○

早朝車を雇つて卷町を出た。僕とは舊知の間柄で、目下同町在住の高橋重四郎氏に賴んで寫眞機を携へて同行して貰ふことにした。快い夏の朝の風を浴びながら、車は平らな田中の道を、彌彦山の方向へと走つた。僅か一里餘の道のりで、私達はもう彌彦からつゞいた小山の麓の森かげの道へ分け入つた。その道はずつと山際に沿うて走つて居り、その道に沿うて幾つかの村落が山を背にしてつくられてゐるのであつた。それらの村落のうちで、先づ第一に私達の注意を惹いたのは岩室と云ふ、稍町がかつた村であつた。

此の村は昔から女を相手の遊び場として有名な村で、今日でも殆んど軒並

みにさうした稼業を營む家がつゞいて居るのであつた。けれども今の私にとりては、その岩室と云ふ名がさうした事よりも、もつと深く心を動かす事が他に一つあつた。それは矢張良寛に關してゞあつた。良寛の數多い歌の中で特に私の忘れ難い幾つかの歌のうちに、此の「岩室」と云ふ響のいい土地の名が詠み込まれてゐるのであつた。

岩室の田中に立てる一つ松の木けさ見れば時雨の雨に濡れつゝ立てり

一つ松人にありせば笠かさましを蓑かさましを一つ松あはれ

岩室の田中の松をけふ見ればしぐれの雨に濡れつゝたてり

岩室の田中の松はまちぬらしわをまちぬらし田中の松はいみじい溫かみの充ち溢れた歌である。「岩室の田中に立てる一つ松の木」——かう云つただけで既にその表現のうちに無限の情趣がある。私は岩室

の村に入るや否や何により先づ此の「一つ松」の所在をたづねないでは居られなかつた。折からとある店先に「岩室案内發賣所」と云ふ小さな看板の掲げてあるのが目にとまつたのであわてゝそれを買つて披いて見た。料理屋や湯宿や女の寫眞ばかりごた〳〵と入れてある小形の美しい冊子の中にも、さすがに其の「一つ松」のことを忘れずに次の如く書いてあつた。

小丸山の一つ松

岩室より石瀬へ通ずる國道の南、田中の丘陵に立てる古老の松を云ふ(里人吉政の松と云ふ)源三位頼政の末子吉政の墓印なりと云ふ。

里人此附近にて古代の石鐵土器古鐘の破片及び石器時代の土人の遺物俗に矢の根石と稱するもの發掘せられたる例枚擧にいとまあらず之を以て之を見れば此の地方が幾千年の舊地なるかは推して知るべきのみ……

云々

そしてその終りに良寛の歌をも添へてあつた。

そこで私はこの案内記の示すところに從つて、岩室の村を出外れると同時に眼を見張つてその方角を見廻した。そして山際の青田の中の古墳狀をした小丘の上に、いかにもさびしげに立つてゐる一本の古松を見た。成程それは特別の注意を拂はないでも、此の道を通る者の眼にはおのづから映らずに居ないやうに見えた。

「成程あれだな。」かう私は思はず叫んで、更に私の後から自轉車を走らせて來た高橋氏を振り返つて云つた。「あの松ですね。良寛さんの親友だたつのは」

「さうです、あれにちがひありませんね」高橋氏は笑ひながら答へた。

しかし、かうした二人の話を聞いてゐた車夫は、突然歩調をゆるめて云つ